

アラン
大戦の思い出
(上)



高村昌憲 訳

【写真】



第一次世界大戦時代のアラン

第一章

トゥールから北西部地方へ向かって行くと、風景が雄大になります。植林された広大な窪地が幾つもあります。そして、見ると二〇又は三〇キロメートルの処に、より一層殺風景な稜線が発見されます。大砲は遠雷の様に私たちの前方で轟いています。私たちはトゥールからその音を聞いて来ました。それは私には一種の雄弁に過ぎませんでした。私たちの内では、誰も戦争のことは何も知りませんでした。私たちとは六名の志願兵でした。その他には、前線の馬小屋よりも向こうへ行かなかった馬の担当者たちがいましたが、彼らは最も不条理でもジョアニーの新しい陣営へ定期的に戻って行きました。一九一四年十月の初めでした。戦線は、我が軍が優位だった戦闘後に、この地方で膠着した処でした。そこでは我が軍がフランス西部へ推し進めていました。しかし、私たちには何の考えもありませんでした。単にゴンティエは、道の右と左の土地を示して私に言いました、「我々の砲兵中隊はこの辺りの何処かにいる様だ」。私たちがそれ故に美しく並んだ木々で飾られた様な遠くの稜線の背後の敵に想像していたのは、その木々の中に大きな突破口を見ることであり、そしてその突破口から葉巻の形をした気球が姿を現すことでした。私はこの種の不気味な砲眼を窺っていました。ところが私たちは多くのことを間違えていました。この脅迫的な地平線は、何ヶ月もの長い間私たちの足許を止めた儘でした。私は戦争の匂いを嗅ぐ前に、四頭の馬を手に入れて再び行軍しました。正午に休憩となり、或る村で食事になりましたが、そこで私は信じられない位に多量の薬莖を至る所に見付けました。そこで知ったことは、私たちの銃は銅の色をした弾丸を発射していましたが、弾丸の先端は尖っていて、後方は少し細くなっていたのです。この先端は私には奇妙に思えました。愚かにも昔からの短刀の形を模倣していたのです。そこで土木局にいたゴンティエと一緒に私たちが始めたことは、弾丸に相応しい形についての際限の無い議論でした。私自身は力学や物理学の素人でしたが、そのことに関しては十年以上も前から、細くなった後部と一緒に先端が半円球の砲弾が良いと理解していました。私は機関車の風切りに関しても小さな記事を書いて嘗て嘲笑したことがありました。しかしその代わりに私は、学者ぶった人々との昼食時に、ふっと砲弾の話の思いついた理工科学校出身者の一人によって嘲笑されました。彼は私に言いました、「まるで全ての状況が分析によるにしろ、経験によるにしろ、大変細かくは研究されて来なかったのです。あなたは様な速度を前にした空気の抵抗に関してご存知なのですか.....云々」。これらの思い出から私は、後部を少し細くしようと試みた弾丸を、私の指の間で逆にひっくり返していた時に戻りました。この事例やその他の幾つかの事例によれば、私は理工科学校出身者やこの種の人々に少し驚いたものです。その状況を捉えるのは困難です。しかし私は他の状況のために行うのと同様に、その状況を大胆に捉えました。何故なら、決して疑う術を知らないこの知識は、古代の奴隷の身分を一新する様なものであり、王と臣民の間の人間世界の分配を一新する様なものであると私は感じていたからです。砲弾については私が正しかったのです。今では最早何の疑いもありません。私が思うに政治についても私は正しかったのです。しかしここでは情熱が経験を曇らせます。ゴンティエは、十八歳から二十歳まで山岳鉄道を建設した人として当然の様に、偉大な免状所有者たちを殆ど信用し

ていませんでした。彼は臆することも無く、全幅の信頼をもって私の言うことを聞きました。その様にして年齢に相応しい大人たちが常に生まれたのです。そして、私は物事の真実のみを絶対的に考察する明白な観念に倣って、失敗した問題について反省する誰かの様に推測します。但し、彼は裕福な暮らしをしているのですが、私は習慣の中で未だに未知の真実と過去の真実との間で如何なる区別もしませんでした。両者の場合、方法によって私の意見は独自でした。私たちが百回言った時に立証されますが、私は単なる一兵士に生まれました。そして、私はまさしく私の報告に関して実際に実験するに至りました。それは私には嬉しくて堪りませんでした。私は、それから東洋の独裁者になっていった理工科学校出身者を探しながら、四頭の馬を一本のロープで繋ぎながら道に戻りました。

この物語は熟考によって書き加えられるようになるのですが、私はそれを心配しています。一種の告白が期待される様なことはありません。私はそんなものを憎みます。私は、生涯の誤りの全てを語る事が有益であるとは思いません。私は、激しい情熱で謂わば大いに戦っていました。そして理性の術策によって償いがたい不幸から身を守っていました。苦境に陥っている誰か他の人にとっては、その点に関して知ることは良いことです。私は武器の如く私の理性を常に磨いて光らせていましたが、それは私の安全のためでもあります。鎧と同じ様に真正なこれらの理性の部分は、取分け一度ならず私を救済しました。しかし、誤りは忘却に捧げられました。それは理性の誤りを除いて、誤りが当然受けるべきものの全てです。戦時では全生涯が広がって、公的になる仕事において私は好意的に判断されていました。しかし私の眼には、患者としての本当の顔付になることが一度ならず起きました。かくして私は、権力をより良く判断することを覚えました。私が話した不気味な稜線について、私は『マルス』の全章に書きました。十六年後又は十七年後に、新たな経験をそこに再び書くことは何も無い、と私は理解しています。しかし厳密でなく又厳しくもなく、物語の動きとしてもっと身近なことを今後は言うべきです。そして第一には利害を離れて私の楽しみから言うべきです。

道は長く、私の当初の好奇心は麻痺しました。馬の運搬人たちの任務が終わる休息になると殆ど私は、人間と馬との選別を行った下士官たちが私たちを送り出した場所に大変な恐怖を抱いていたことには気付くことが出来ませんでした。人が遠くから抱いていて私が時々その後感じたこの恐怖は、本当の多くの恐怖と異なっています。しかし、この恐怖もやはり辛いものです。ですが行動を妨げない以上、この恐怖は自然に消えます。私が見ることが出来た様にその様な人間が、大砲のもう少し近くで恐れる唯一の時間を絶えず取除いて馬たちを大胆に調教します。そして、もう一つの範囲の内のこの恐れは、一つのことならず多くのことを説明しています。この範囲とは略式裁判や情け容赦の無い罰の場所です。ここに私は、馬たちと干し草とそれとは別種の食糧補給に忙しい頑健な人々しか見ません。それは全てが正確に、そして絶えず繰返される恐怖の圧力の下で行われます。そんなことで私はこの種の心配と不変の思想を認めていましたが、それを正確に言うことは出来ません。しかし私は待つ視線を所有しました。私は、戦争に最も優れた人間や戦争に最も優れたしるしを待ち伏せしました。その視線の中で私は何か新品のものを見た様に思います。それは軍人たちが通常は殆ど見せないものです。多分、私たちに対する一種の同情であり、彼ら自身に対する同情でした。その後私は騒音の手の届く処にいるが、銃撃からは

手の届かない処にいる軍人をより良く知りました。彼にはより遠くへ行く人々が信じられないのは非常に驚きです。彼は、彼らを容易に英雄と見做します。恐らく羨んでいるのです。私は、無言で謝るこの善良のしるしを更に感じました。その善良さは、もう少し遠くでも認められますし、その他に瀬戸際において度々脅される連結具の人々にも認められます。これらの感情は名誉を閉じ込めていますが、その他の人々にも達する名誉です。しかしながら恐怖への回帰によって、それと同じ人々が逃亡したことで告発される者を軽蔑する様に勧められます。これらの感情の領域は、実際の戦争の回りに配置されていて、どんな人も読む偉大な書物の様に創られています。

私が到着した丁度良い時に、手厚い一種の歓待が始まるのを見ました。私が既に感嘆して見る機会を探していたのは本当です。しかしながら私が知ったのは、この状況の中では騙されるよりも寧ろ明らかにさせることです。兎に角、私の考えがこの村で、私の知らなかった誠実な色調を理解したのは事実です。多分、感染することによって私は左程静かでない時間におりました。私たちは霧で暗闇の中に再び降り始めました。他の上官たちは私たちを急がせました。地面は平坦でなく泥だらけでした。馬たちは引っ張られていました。夢の中の様に大変に速く私たちは、半ば崩壊したマンダルの大きな村を通り過ぎました。そこは火事と腐敗の匂いが発散していて、私たちは森の方へ回り道をしました。そこを通過する時に、誰かが私たちに馬の陰に隠れる様に知らせました。そこは一寸した恐怖の時だったのです。一週間後に私は、大変奇妙なこの忠告を実感する羽目に陥りました。

この警告の後、私は幻想的な物語の中で生活している様でした。森の縁で僅かな蠟燭で照らす野営は、奇妙な外観を与えます。私は絶壁や幾つもの洞窟を見た様に思いました。一度ならずその場所を見直しました。けれども一度も私の最初の印象を認めることが出来ませんでした。そこから通常は進路を良く見出しますけれども、恐らく真昼でも何時も道に迷った様なことが起きるのです。恐らく全ては最初の入口次第なのです。そしてその晩に、私は電話線を見失いました。屈辱的な挿話から勇気も少し失いました。ひげを生やした上等兵が、恐らく私の肩で燕麦の袋を上手に運ぶために私を連れて行きました。ところが私は燕麦の袋を上手に運ぶことが出来ます。そして、もっと重い物も運びました。しかし肩で燕麦の袋を一杯にする単純な試みは、一瞬に或る人の判断で行われることなのです。袋を運ぶことは上等兵が言ったことだったのです。私は、ジョアニーの曹長が「馬はあなたの仕事ではない」と私に言った時に既に思った様に、私は戦争に向いていないと思いました。私がその次に覚えたのは、軍隊の管理が完全に人間に奉仕させているのを知ることです。かくして私は五つか六つの仕事を行いました、それについては上出来でした。

私は野性的で自由な生活を二日間送りました。料理で使うために枯木を探しに行きました。そして私はゴンティエと一緒に、葦で覆われた二、三軒の小屋で探し始めました。書状は一通も届きませんでした。そのことだけでも全てを忘れました。私は大地と木々に書かれた特徴しか読みませんでした。私の思考はそれ以上遠くへ行きませんでした。どの様にしてそれ以上遠くへ行くのでしょうか。人間は知覚せずに思考を組み立てられません。しかし、私は上手に読む術を知りました。そして私にとって十分に新しい特徴を極めて容易に読みました。それは一個の砲弾です。既に特有のもので、大変に威圧的で、腕の半分程の長さで、重くて固そうでした。この物が落

ちていそうな場所を探しながら、その時私を前夜に目覚めさせた野生の鳥の様な一種の叫びを理解しました。私はこの物体の速度と人間の集団と出合う時に生じるかも知れない結果を大変良く理解したのです。その晩その物は、偶然にも沢山の木々から私は抜け出していたので、すっかり燃えている稜線と形をなしていない廃墟を見せました。「燃えているのはボーモンだ」と私は言われました。翌日、私はM少佐の前にいました。彼は有名で、イマージュ通りに似ていた立派な騎兵でした。彼は私をそこに見付けて満足そうに見えました。そして、その他の志願兵の一人である部下のWと共に、電話交換兵になることを私に指名しました。「稜線づたいにボーモンへ北上すること。あなたはそこで五時に私と落ち合うこと」。同様に志願兵でも階級は上等兵であったゴンティエとの大きな落胆は、馬たちと一緒に森に取り残されていましたが、私たちは葦の小屋とロビンソン・クルーソーの生活にさよならをしなければなりませんでした。私とWと、のっぽで痩せていて歌う様な声をしているリシャールと名乗る者と三人で、畑を一直線に横切って出発しました。このリシャールは突然に現れました。皆が彼の名前を知っていましたが、誰も見たことがありませんでした。不在でした。兵營で彼の身分について言った時、誰かが「クリーニング屋」とか、その種のことを答えました。彼の名は志願兵一覧にありましたが、名前を呼ばれても何時も不在でした。軍隊列車の中で、馬たちや秣の束の間を探しましたが、無駄でした。彼はトウールで降りませんでした。森の中で彼は名前だけでしかなく、噂だけの人でした。今やっと存在したのです。彼は全員が知り合いであるが如く、挨拶や機嫌が良い口調で会話を始めました。やがて彼は、未だ目新しい砲弾の幾つもの穴に驚いていました。上空を凝視して、他からも砲弾が私たちの処に落ちて来ることは十分にあり得ると結論付けました。全く海にいる〈パリ人〉の様でした。実際に彼は〈パリ人〉であり、森の中の労働者になりました。ところで何と彼は、軍楽隊が演奏する時のクラリネット奏者であると語りました。私は間隔を置いて再び彼に会いました。私たちの会話は、「詩人と農夫」や「ファウスト」やその他のコンサート作品を、クラリネットや私を気にしながら低音の演奏をすることにありました。彼は不在のため演奏の仕事継続していませんでした。というのも、素晴らしい結果を挙げた孤立しての非常に危険な監視所に何ヶ月も過ごしていたからです。そこには彼と同じ仕事をしていたビジャールと言う名の人と一緒にいました。そして、ビジャールは彼に普通に聞きました、「リシャール、あなたは結婚しているのかい」。相手がそうであると言った時に、ビジャールはつけ加えて言いました、「あなたは妻を寝取られた男だ」。彼らは最後には殴り合いになりました。私は彼らと一度か二度、彼らの隠れ家で会いましたが、美味しい野菜スープを出して貰いました。何故なら彼らは庭で栽培していたからです。そしてリシャールが言った様に、その時は大変に楽しく、いつの間にか自然と夜になりました。その場所はマルヴァザンと呼ばれていて、不気味なリュ・ド・マの向こう側にあり、我が軍の軍事行動からは極端に左側にありました。この監視所に将校は一人もおりませんでした。弾丸の音が鋭く鳴っていました。しかし、この一隅は次第に忘れられていたとも言わなければなりません。左側はコメルシーやサン＝ミイエルへ至っていました。そして我々の大砲は先ず西側へ向かっていました。それは以前の戦闘へ向いていたのですが、少しずつ北へ向けていました。我々の戦術の中心と発砲と煙の地点は当然であった如くまさに百八十度以上ありました。従ってリシャールは敵の側面に十分に進んで、如何なることも考慮に入れずに興味あるも

のを幾つも見ました。三ヶ月後に、彼は作業場へ戻されました。そこは小学校並みの一種の理工科学校でしたが、彼には自分の職務に対して勇敢でした。彼は言いました、「畑を真っ直ぐに通るのは何て楽しいのだろう。小麦や乾草の山の中にいる赤いズボンを穿いたこれらの不幸な人々は何故埋葬されないのだろうか。勿論、面倒なことは分かる。でも、彼らは砲弾を幾つも運んでいるのである」。私はこんなにも穏やかな人間を見たことがありませんでした。もしも彼と、政府や同盟や公式声明や勝利のことを話したなら、彼は大変に驚くに違いありませんが、何時も非常に礼儀正しくそして向学心を失わないことを望んでいます。私に分かることは、これらの問題のことを話す彼の考え方は少しも私に伝わらなかったことです。何時も「ファウスト」とか「詩人と農夫」でした。幸福であることを誓った人間には些細なことでなければならないことなのです。

既に述べたことで終わりにしたいと思っていました。その上、私は日付けを思い出すことが出来るノートを持っていませんでしたので、年代順の表記は無視します。その様にして私は何の心配も無く、そして巨大で忍耐のいる仕事が有益な成果を生む作家ノルトン・クリュの雷鳴の危険に身を晒します。私がやりたいことは大したが無いのでしょうか。恐ろしくて信じ難いことがあっても、私は何も語るべきことはありません。私は砲兵隊の電話交換兵として参戦しました。私は仕事で危険を冒しましたが、それはデカルトやテュレンヌ（1）の時代の戦争が何であるのかの概念を少しは私に与えました。私は危険や冬の長い兵営に関しては理解しています。この戦争で沢山のフランス人たちを見ましたし、私が如何に彼らを見ていたのかを言いたいと思います。何も捏造していないのは極めて確実です。その上、風刺的短文や道徳的批判のどんなものでも放棄します。私の風刺的な短文は書かれますが、私が望んだ様にあらゆる話から分離されて区別されます。そして今ではここにある話は、如何なる風刺的短文の意図はありません。私はこれらの頁を一九三一年に書いています。戦争に反対して戦いながらも、その側面を目的にしているのだと私は思います。別の何かがあるのでしょうか。勿論、戦争ではありません。決してどんな戦争も繰り返さないのが唯一の理由になっているからです。私が語るのは過去のことです。当時のことを良く理解するためには、数年間の適当な時間が必要です。そして多分、忘れていたこともあると思います。（完）

（1）テュレンヌ（一六一一～七五）は、三十年戦争で神聖ローマ軍を、フロンドの乱でコンデ公を破った名将で、戦略家で名高い。

第二章

私はボーモンに戻っています。あるいは寧ろそこに到着しているのであり、M少佐と二人きりで町の右側におります。つまり我々がやって来たトゥールからの道と、メッツへ行く大通りの交わる交差点の北側です。垂れ下がった標識が指名しているとおりです。そこには家が二軒ありますが、向かい側にある他の家々よりも壊れておりません。少佐は敵の側にある家の背後に身を隠します。彼は私にそこに幸せな時を残します。彼は言います、「あなたは正面を見張ってくれ。しかし、この時間は安全ではないぞ」。彼は私に尤もなことを言います。私は少しも少佐らしくないと思いますし、不平等でもありません。彼は言います、「あなたの様な人が戦火の前線まで来るのは、好奇心に駆られたからであるのは良く分かっている」。彼はリューマチで体調が悪いことも私に言いました。それが何であるか私は分かっています。そして彼はつけ加えて言いました、「我々に敵がやって来るかも知れないと考えてはならないのだ」。これは最も賢明な忠告でした。私は最早、この人物とは電話で話すだけの知り合いになりました。それも僅かな時間話すだけです。間もなく彼は大佐になりましたが、厳しくて酷く嫌われた連隊長と見做されていました。その顔は美しいが冷静で、眼は澄んでいて軍人らしい雰囲気がありました。しかし彼が私を決して兵隊として扱わなかったのは事実です。それは市民戦争の時代になったと言わなければなりません。秩序が回復されなくなりました。遠方の権力が既に統治する術を知らず、私は電話が遠方に達しないことをやがて確かめなければなりませんでした。一人ひとり自分のために参戦していましたが、それらの様相は無視されていました。それが三ヶ月とか四ヶ月続きました。この志願兵の市民は、そこに熱意と良識で自分の場所を容易に見出しました。しかし、小さな戦争が何時も続くことはあり得ました。その時は、私がやがて知った様に、我々の九五砲兵中隊、一二〇砲兵中隊及び一五五砲兵中隊の大砲は車輪の上に設置されていて、要塞から発射された時代でした。この様にして私たちは砲弾や旧式火薬の莫大な貯蔵を行わなければなりませんでした。そして私たちは一人で二発送り届けました。しかしながら私はこれらのことを偶然に覚えただけでした。

その夜に、真剣で平静な会話をしている中で、私は大砲に関する初歩的な学習を受けました。だんだんと大きくなって来て今まで聞いたことがない奇妙な音によって、砲弾がやって来たことを知りましたが、それは鳥たちの騒々しい鳴き声の様でした。それらの砲弾の音が四種類あったのは何故か私は知りませんでしたが、それでも大変良く分かりました。私たちの屋根に突っ込んだ後に直ぐに、まるで私たちの鼻先で爆発した様でしたが、他の家も交差点も穴だらけにしていました。視界には一人もおりません。その後で、雨後に仕事を行う様に、私たちは仕事をしに行きました。単純なことでした。Wと私の二人は、歩兵隊や砲兵中隊や司令部を順番に、昼も夜も電話をする任務を与えられていましたが、問題は一ヶ月も経つと我が軍よりも優れたものが現れて来たことでした。装置が悪くなったのです。私たちは一人が叫んでいる間に、もう一人は眠りました。すると次のことが生じました。疲労は増大し、周期がより一層短くなり、私たちは一時間眠って一時間目覚めている様になりました。そして、ついに私たちに援兵が与えられた時には

、二人とも幽霊に似ている様になりました。

Wは、かなりの怠け者で未大学入学資格者でしたが、良い教育を受けていて大きな家の人でもありました。以上の様な私たちでしたが、最も不明瞭な軋む音の中から言葉を認識するのが重要であるこの困難な仕事にとって、私たちは最高であると思っていました。後で私は、彼が葡萄栽培者であることが分かりました。仕事には巧みになりましたが、彼はその時に幽霊を生んでいた〈連絡先 (Coordonnees) 〉という言葉が原因で、絶望する程苦しんでいました。彼にはその言葉が少しも聞き取れなかったのです。私たち二人にとっての仕事は、軍隊の様式で命令を伝達することでした。つまり決められた言葉でした。文明社会や読書の或る種の習慣がなければなりませんでした。そうすれば私たちは奇跡を生みました。夜間の二回の砲撃を当てにすることが出来ました。そして何時もWは、コルネットを身につける前に、扉が庇護している女性教諭の鏡付き洋装タンスを開けました。私たちには恐怖以上に悪いものは他にありませんでした。

そうしている間に、新しい権力者たちが身を落ち着かせました。砲兵中隊の二人の大尉は、上手い具合に風の当たらない校舎の背後に居続けた歩兵たちを厄介払いして、その地下室にベッドを作り、私たちが今後は黒いテーブルの前に座らされ、その横に一種の食堂を仕上げました。彼らは二人の電話交換兵をちらっと見てから、疲れて茫然となっていて役に立たないと感じました。以上のことによって私たちは散歩するための午後を手に入れました。私たちは電話のことしか知りませんでした。セイシュプレイもフリレイもランビュクールも謂わば抽象的な場所でした。こうして私たちはメッツの道から出発しましたが、砂の散歩道と同じで単調でした。ボーモンはこの道に沿ってあります。バルコニーの様にオ・ド・ムーズ (ムーズ川上流) で囲まれていたり、敵が全て占領している広大な地方を見下ろしているのが長い稜線です。斜面の下には溝があり、ルミエール、ラ・ソナール、モール＝マールといった不気味な名の小さな森が続いています。道は、添え木を付けた葡萄の木の間を進んで行きました。水筒や銃や薬莢やコンビーフの缶詰が全て一緒に見付かりました。そして数々の黒い死体がそこに放置されていました。Wは若者でした。彼はプラトンの弟子の様に死体に引き寄せられていました。私はこれらの事物を近くで見ない様にしていましたし、常に見ませんでした。私は想像力を信用しませんでした。彼は違いました。「この気高い光景を味わってくれ」と私は彼に言いました。彼はそれ以来、眠気を失ったことを私に告白しました。しかし、見るべきものは他に沢山ありました。無傷の砲弾、高さ一メートルの針金の大きな導火囊、道の溝の様に哀れな塹壕、死んだ馬たち、全てが軍事力のしるしです。勿論、生きている人間ではありません。それらの上には余りに美しい空がありました。それが私たちの休暇でした。私たちが常に活動的にフリレイに近づいた時、事態は悪くなりました。私は如何なる危険が作動中の大砲にあるのか知りません。我が軍の砲兵中隊は私たちを越えて発砲していました。敵はルミエールの森を砲撃していました。急いで土手に腹這いになった私たちが見て聞くことが出来たのは、砲弾が樵となって、緑がかった閃光と胸を引き裂く爆発後に、小枝の様に太い枝を吹き飛ばしていたことです。私たちの前方の下の方に、濃い青色の服を着てベレー帽を被った味方の中隊が姿を現しました。恐怖の森へ降りて行く時を待っていたこれらの連中に、私には恐怖のしるしを注視する時間的余裕が十分にありました。その後、休暇中であった私は、殆ど眼には見えない同じしるしを再び発見しました。戦う種類の人間は、犬とか

猫の種類と同じで私にははっきりしていませんでした。私自身にも眼鏡の様にこれらのしるしが付いていると思いましたが、その日は私たちがどんな顔を見せることが出来たのか、私には分かりません。しかし、私たちの状況は要するに我慢出来るものでした。私たちは自分自身を自由に決められますし、私たちの安全に備えなければならないだけでした。私たちが行ったことは、兵士の慎重さと地面のどんなに小さな起伏の知識も迅速に身につけることでした。その様にして素早く地面にぴったりと体を押しつける技術を身につけました。私たちが戻った時には騒ぎは収まっていて、私たちには最早分からないことでした。

この日の昼間の出来事は、私が絶対的権力を仲間に行使していた無政府状態の訓練期間の終了を示しました。そして私たちは、二人の眼に見えない権力による任務に二人共就きました。M少佐とB少佐です。後者のB少佐は一種の重量級の素人で、ベルネクールという地点から明確に間違った権力を行使していました。我々の二人の大尉が彼を嘲笑していても、私が信用されていたことは容易に私には分かりました。B少佐は私と同じ様に一市民であったのだと私は想像しました。彼の仕事は敵を悩ませることでした。その代わりに職業軍人の将校たちは、野営地を横切る食事の運搬人には少しも興味を抱きませんでした。寧ろ彼らは食堂を整えて砲兵中隊の利益にしましたが、私はその仕事に重要性も困難性も直ぐには真価を認めませんでした。差し当たり私は異常な熱意を示しましたし滑稽でもありましたが、B少佐の眼には入りませんでした。彼は私を一種の電話の英雄としてついに見に来ました。そして私を最初は一等兵と呼ばせていましたが、次には上等兵になりました。この少佐は長靴を履いて情熱に溢れた小さなナポレオンであり、異常な熱意も又示していました。そして権力の新組織によって素早く鎮められました。私も又鎮められました。しかし、これは極めて長いものになりましたが、それは二人の大尉が私を考慮に入れてくれていたからです。恐らく彼らは私を少佐のスパイとか、あるいはもっと正確に言うなら急進政党的の密使と見做していたのです。しかしながら私は公正を欠きたくありません。彼らは、これらの噂話の小細工を笑い飛ばす術も知っていました。両者とも私に対しては意地悪な上官たちに従って、言うことを聞かない恐れは決して持ちませんでした。彼らは私を誠実であると感じていましたし、彼らは間違っていないでした。その後私は、他の上官たちの極めて不当な疑念により、兵隊として何らかの術策も覚えました。しかし結局のところ私が強く感じたのは、取るに足りなかった私自身のことよりも、寧ろ他者たちによる奴隷の身分でした。

ここで長い付き合いにはなりませんでしたが、B大尉のことを少し書きます。私は彼を森の中で垣間見ましたが、ほっそりしていて機敏で優雅でブロンド色の長い口ひげがあり、長いマントを着ていました。英雄のイメージそのものです。ところが彼は最も臆病な人の一人でした。彼の用心深さと恐怖と逃げ様には皆が笑っていました。この点に関してもう一人の大尉が、私の前で彼に言っていました。「だけど、もしあなたが歩兵隊にいたなら、どうなるのかな?」。これに対してB大尉は答えました、「この場合は戦闘の場面に身を置くと思いますよ。でも、ここで自殺させられる以上に愚かで無益なことは何かあるでしょうか?」。この答えには心惹かれました。完全に勇敢になるためには、恐らく最早何も期待してはいけないのです。そして、私は歩兵隊の中尉や少尉たちを見ましたが、彼らは自分たちの人生に終止符を打っていた様に見えました。彼らの陽気さは私をぞっとさせました。そのことでは私は後ろにいました。人は常に誰か

の後ろにいるのです。私たちが臆病に戻ったとしても、お分かりの様に精神が無い訳ではありませんでした。しかしながら恥辱は避けられず、認識して理解していた司令部の精神までも彼の中では消失させていました。その様な人間を扱うことは何ものでもありませんでした。少なくとも今では私が発見した軍隊の滑稽なことの中で、私は自分の役割を大変上手に演じていました。私たちは蠟燭しか持っていませんでした。私は上官から石油ランプとブリキ缶を買わされていました。私には大変に自慢です。しかし、その大尉は私に言いました、「このランプは何処から持って来たのか?」。私の答えについて彼は極めて真面目に言いました、「あなたが軍の照明費用を払うことは認められない。そのランプの火を消せ」。私は口実を発見しました。何故ならそれは私の仕事であり、そして私は自分の仕事をする術を知っているからです。私は言いました、「大尉殿、私はこのランプを軍の電話のためには決して使用しません。只、単に私の私用の手紙のために使うだけです」。私が同時に二つの仕事を行っていたことに気付いて下さい。私はそれ故にランプを守りました。けれども私はそのことのために、優しさに溢れた彼の視線が全て偽りであったとは決して信じませんでした。実際に彼は理工科学校出身者でした。この種の間人は、私も知っていた様に正当化する術には大変上手に長けていました。彼は私の巧妙な口実について私に感謝していただろうと思います。一度ならず私は彼に厚意を感じましたし、私たちの間で彼は迷っている様でもありました。彼は最後には引き下がりました。彼には実際に、棍棒や車輪が砲台に欠くことで利益を図る様な仲間はおりませんでした。

もう一人の理工科学校出身者は全く卒業したばかりで、若い雄鳥の様に大尉の前に立ち上がりました。この者はル・バルビュという名前の戦士でした。明らかにブルターニュ人で、明るい顔付をしていて赤毛で、部下たちに大変厳しいのですが、勇猛果敢で皆から尊敬されていました。私たちは友人になりました。私たちの楽しみの一つには計算規則を研究することがあり、休憩時間に黒いテーブルで議論することでした。しかし私が気付いた限り、大砲に関する幾何学的な進展は上官たちに如何なる効果も生まれませんでした。私はついに分かったのですが、彼らの重要な関心事は権力を持つことであり広げることだったのです。そして、まさに戦争についての影響がどうであるかという、それは恐らく射撃装置や輸送や他の作戦よりも重要だったのです。監視で養われて大変に熟練したゴンティエが言っていた様に、砲兵が身につけている幾つもの注意力でもって彼は何時も発砲します。しかしながらBは休暇を濫用していたと言えます。ル・バルビュは私に言いました、「第七砲兵中隊は長くジョアニーに止まっていることになるかも知れない」。

秩序を破壊したこの話は私の記憶を思い出させますが、その他の多くの人々と共に守っていたメッツの道も私は思い出します。私たちはコレッジの生徒の様に陽気でしたが、少し息切れしていました。或る雪の日でした。数々の大きな砲弾が鉄橋を渡る列車の様な騒音を立てていました。ル・バルビュは尋ねました、「連中は何でも狙っているんだ。だって連中は何も見ていないし、上空での雪との巨大な摩擦音は弾道を短くすることが必ずあり得るからね」。それから十分に駆け回った拳句に他の話も色々となりました。私たちが立入禁止地帯を調査するには、視界を遮るこの雪は好都合でした。サン＝ボサンの町を見下ろす丘へ私たちは行きました。その時は視界が悪く、ゴンティエが雲雀の様に現れた時まで偵察手は穴の中に這入り込んで暇をもて余して

いて談笑していましたが、ゴンティエは私たちを見てすっかり満足しています。彼は私たちに景観を語りました。すると一種の魔法によって、彼が語ったものがだんだんと眼に見えて来たのです。その時は雲の切れ目だったのですが、私たちは見ている者が見られもすることに気付くのが遅すぎました。ゴンティエは穴に潜り込みました。そして私たちも潜り込みました。ル・バルビュと私は加速して大急ぎに走って退却しました。殆ど直ぐに七七ミリ砲が私たちを追いかけました。その上、遠い距離ではありませんでした。しかし個人的に狙われていると考えると、勇敢な者たちでも混乱します。ル・バルビュは私には十分すぎるお手本でした。私は兎の様に彼の後に続いて走りました。その後、私たちは哲学の問題も話しました。この若き英雄は飛行でも有名でした。彼は〈勇者〉と呼ばれていました。彼は私を、今度は大空の冒険に連れて行きたがりました。しかし私は聞こえない振りをしていました。私は単に命令を実行するだけです。決して危険を求めていることを規定の様に理解していたので、この時もそれと同じ状況の一つでした。結局のところ軍法の改正が、私に選択する様に強く命令する漠然とした時代に、私は自分自身に何を期待されているのでしょうか。私は退屈な仕事をする前からは後退していました。十年後には全ての自由を私に委ねた大学の働き口を選択して、そしてもしも戦争が未だ続いていたなら、私は研究していただろうと自分に言いました。一九一四年八月に、私自身と結んだ約束を守りたくて、そして私の重荷によって歩兵隊から離れたかったので（レジョン・ドヌール勲章は重要でしたし、私は今でも心が動揺しています）、私は好機に導かれる儘になって、誠実に私の仕事を行うだけでした。自己との誓いの成熟した部分や好奇心の同じ部分も、その点についてもっと適切に言えるのは、私は悲劇的な時代の間でも市民生活に我慢しなかったことです。そして多分、下劣なありふれた考えや反乱の間で、砲兵と同じ位に危険な道を取っていたでしょう。

上品なB大尉は毎日曜日に、森の中へ必ずミサへ行っていました。そして、私の若い時の仲間であったWは殆ど必ず自分の服にブラシをかけて、大尉と一緒にいました。このことは私には少しも気に入りませんでした。Wは何も信じていませんでしたが、礼儀正しいために昇進していました。ところで彼は礼儀正しさを信じないのでしょうか。それを信じる処は始めと終わり、覚えるのも容易ではありません。大多数の人々の信仰において、信じている様に見える人々にとっては尊敬以上のものがあるのでしょうか。この問題はそれ以来私には興味がありましたし、数々の深刻さを発見しました。しかし、私たちが存在していたこの悲劇の中では、私はそれらの微妙な意味合いを斟酌する用意は成されていませんでした。私は、戦争において〈キリスト教〉が人々を駆り立てるために熱心に働いているのを見るのが大嫌いでした。従軍司祭たちの処に私はいます。金モールが三本入っている警察の縁なし帽子を被ったその一人に私が会った最初、私はもう一人の大尉の処へ走って行きました。その彼は私が出合った唯一無二の人でした。私は彼に、階級や敬意の動作についての教育で、金モール三本（大尉）の司祭のことを話しているのを一度も聞いたことがなかったと言いました。私は敬礼をするべきだったのでしょうか。この大尉は、私が或る時は快く、或る時は気難しく親密な関係にならざるを得ませんでした。一種の職人でした。恐ろしい程の気まぐれであっても知性があり、管理することが巧妙で十分に勇敢でした。彼には宗教色が少しもありませんでした。彼は私に言いました、「私は、その階級は分からない。あなたがやりたい様にやりなさい」。二日後に、私は敬礼をしないことにして自分で気に入る

ました。その頃は私も戦争にあっては既に第二期でした。今までよりもっと多くの時間的余裕も出来ました。集団を作りながら、若くて単純そのものの何人かの下士官たちとテーブルを囲み、正面にある荒廃した家の中で、今まで以上に人間らしい生活をしていました。私はヴォルテール風の肘掛け椅子に座って議長になり、〈将軍〉と呼ばれていました。この議会に、軍人たちの墓の問題で半ば司祭で半ば大尉の、傲慢で冷淡な男がやって来ました。彼は下士官たちにしか話さない様に変な注意を払っていて、「この家の〈元帥〉を言ってくれ」と言いました。彼らの年齢になると至る所で大事にされていたために自然な動きとして、皆がテーブルの大統領に答えを待つ様に私の方を向きました。私は嘲りには精通していますが、獰猛でした。既に今日では、それでよしとしています。でも、何故でしょうか。それは好人物たちを酷く悲しませるからです。どんな種類の独裁者たちも、無抵抗の服従が回復させた不幸の日々において、希望を取戻しに行ったことを私は良く知らなかったのでしょうか。精神と力のこの奇怪な同盟を前にして私は躊躇することが出来たのでしょうか。勝利にとっては非常に确实であっても、共通した悲しみの底を極めて上手に描いたこの二重の自負に、私はこれ以上耐えられないものでした。そこで私は如何なる混じりものも無い純粋な勇者になりましたし、確かに一徹になったのです。私の若き友人たちは心を奪われてうっとりしていました。それからこの〈殿下〉は素早く注意深く撤退しました。それに反して、親切で諦念していて眼に見える権力への如何なる加担も無い若い司祭と、泥だらけの電話交換兵や歩兵に対しては、何という配慮でしょう。同じ日に、大変に泥だらけになったこの〈神〉の男のことで私は、金モールの無い電話交換兵の伝言を傲慢に受取りに来たB大尉を嘲笑しようと試みました。私はB大尉に言いました、「あなたはあの男のことを知っているのですか。恐らく知らないでしょうね」。彼は殿様風に言いました、「それで何かあるのか」。「彼は司祭です」と私は彼に言いました。「あゝ、そうだ。私は知っている」と彼は答えました。そして私はつけ加えて言いました、「本当の司祭とは、祭壇に〈神〉を降ろさせる力を持っている人です」。でも、私の砲弾は何の効果もありませんでした。私はそのことを十分に予想しなければなりません。〈神〉は司令部と共にいるのです。それでもそれらのことは問題になりません。B大尉にとって一種の謎あったことでも、私は自慢することさえ出来ません。その時から私は偉大な演技を理解したくありませんでした。何故彼は私に手を差し出したのでしょうか。秩序には召使いが事欠かないのです。頭の良い人はそこで大変に美しくて尊敬された地位に就きます。もしもその地位を拒否すれば、頭の良い人を最早誰も注目しません。しかしながら私は自分を騙さないなら、権力を望まないこの不愉快な精神を権力者たちは益々慎重に扱わなければならないでしょう。（完）

私は、ここで重要な諸問題に触れます。私はそれらの問題を決して探求しませんでした。私を見付けに来たのであり、態度を決めなければなりません。私はこれ以上待つこと無く、従軍司祭を懲らしめたいと思っています。それでもお分かりになるでしょうが、彼らは全てを失うことはないでしょう。それからずっと後の一九一六年に、私は我らの戦争によって戦火となった最前線のフリレイにいました。私は火薬の様に活発な若者の班の絶対的な班長でした。或る夜に私の部署に這入って来た師団付き司祭は、葉巻と巻き煙草を持って来て、私立学校教授を職業としているアレルと名乗りました。彼が、私の軍隊の階級と学歴を大変に尊敬していたことを私は次に知りました。その夜の私は、大変に泥だらけになっていて金モールは一本も無く、人間的にも同様に単純に見えていました。その時の私は、新聞付き司祭を前にして陽気で、水も割らずに酒を飲んで特別休暇で罵り言葉を言うまでになる喜劇を演じている様にも思えました。私は彼に言いました、「あなたは神の名にかけて休暇中であることを宣誓している人々の立場にいますが、自殺させられなくてはならない人々の立場にもいるのです。それというのも司教が話している様に、私たちは死者たちでなければならなくなるからです」。この決まり文句は、私が〈神〉の使者を篩にかけた嘲笑の微かな観念を与えていますが、それは私が思い出にも残して置いたものです。これは悪趣味であっても確かなことでした。しかし、私たちが良い趣味と礼儀正しさによって、どんな恐怖へ行ったのかも大変良く理解していました。そして、もしもアカデミーの優雅さで激しく砕くので無かったなら、下位も上位も全ての自由が失われていることを私は今日でも思っています。泥や血に対しての唯一の源泉である自由な判断力は、社会に応じて没頭することでしか自らを救済出来ません。かうして私は既に福音書を私の方法に適用していました。しかし、それは奇妙な方法です。左翼の理論家たちは、侯爵や耽美主義者たちがそれを愛していないのと同様に、愛していないことを私は認めました。私は何時も軍隊無しの將軍でいるのでしょうか。あり得ることです。私は最初に、そして二回目も更に激しく耕さなければならないと考えます。結局は優美な知識という根を切ることなのです。あらゆる危険を冒して切ることです。しかし、代数や文学の果実であるこの不条理な戦争に近づくのは如何なる危険なののでしょうか。フリレイの若い我が軍人たちは持ち堪えていました。これらの子供たちは心から笑っていました。私は誰を信じて、何が信じられるのか、もう一度自問します。私は死や苦痛によるこれらの困難な日々の中で、ふり返る度に見たものと別のものを恐れていた人間は一人も見ませんでした。そして、アレル自身は私が見た処では、勇気と友情に厚い男でしかありませんでした。それ故に立派で力強くて至る所で通用した貨幣の様な彼は、俄雨の下にいる様に元気一杯に体を激しく揺すり、決して文句を言うことも無く、説教することもありませんでした。彼は少し後になって私のために内密に私たち二人の間で、低く地面の方に注意深く私を見る二人の説教師が行う説教を見守っていました。別の日の昼間に彼は私に言いました、「そうではないが、私の金モールは何処にあるのか、私の権力は何処にあるのか、どうぞ教えて下さい。私は男です。そして男にとって正しいことは何でも私にとっても正しいのです。私たちが宿営している時、私の住まいは何処

でも構いません。皆が何時も良い住まいを取って置いてくれます。屢々ベッドも取って置いてくれます。もしもあなたがそこに私を見付けたとしても、その時は私を無視して下さい。家畜小屋でもどうにかあります。私は喜んでそこで眠ります」。それは本当でした。私は言葉を決して信じません。しかし動物の様に眠っているこの男を私は屢々見ましたし、彼は私以上の歩兵でした。大變に立派です。聖人たちは私には怖くありません。しかし歩兵を語るには、私は一番良い別の機会をもう一度持つことになりました。彼は私に言いました、「あなたがここで行くことは、私自身が行うことよりもそれだけ良く私は理解します。これらの不幸な男たちの真ん中が、あなたの男としての場所です。そして他の場所は全てがあなたに恥をかかせるに違いありません。しかしその時に、あなたがいなければならないに違いないのは、歩兵たちと一緒にです。もしもあなたが望めば、私と一緒にです。もしもあなたが望めば、明日も一緒にです」。私は考えたことや今でも考えていることを彼に言いましたが、それは一度で良く分かりもしないで決めた決心が、そこにあるということです。そして望むこととは、人が一度で望んだことであり、私が知ったのはそんなことです。しかしながら、私の勇氣は相手のこの地獄の集まりの端に止まっていたのを私は十分に認識していました。事實は、最初の数ヶ月間は難所も無く用心することも無いが、私は命を落とすに違いないと思いました。しかしその後砲兵の手腕で、私が出発する前に見たり聞いたりすることを条件で、逃れられるという考えが大きくなりました。要するに勇氣は、どんな武器もそうである様に戦争では消耗します。実行するための自由を守りながら、その時には又必然性に身を置きます。小説的な空想的な精神を快く思わないこれらの熟考によって私が理解したのは、トルストイの若き英雄です。それは馬を買うために後方へ送られて、決して運命に逆らわないニコラス・ロストウ(1)だと私は思います。

更に私は少し後になって三ヶ月間診療所にいた後で、足を負傷した人の収容所に三日間静養しました。そこでは無言の恐怖が支配していました。我々はヴェルダンへの道に全員いましたので、想像力が働くのでした。ところで私のベッドの隣には、誇り高く物静かな風采の司教がおりました。彼はモロッコ人の狙撃兵として回教徒となって装備を整えていました。彼の庇の無い帽子の上の三日月は冷やかしの美しい観察対象になりましたが、黒い瞳は覚悟に溢れていて恐らく絶望で一杯であり、どんな空想からも私を逸らせました。私は、彼が行ったことを知っていましたし、多分彼よりも良く知っていました。その無言の悲劇は最早感動させるだけでした。その人は少しは健康的な人物でした。私は彼の新しい服と新しい勇氣に感嘆しましたが、彼は私に二週間後も止まっているのか尋ねました。多分、彼から私の無鉄砲な友人であるアレルのことを想定しながらも、私は彼に欺されました。それはアレル神父の定義だったのです。その定義とは「前線は最後の憲兵から始まる」。恐らく、この未知の言葉は最後の憲兵を乗り越えませんでした。しかし私が知る限り、足を負傷した人の診療所はその他の何処の場所よりも出発を決心することが難しいのです。つまり怪我が治っていても、各人が独りになって誰も残っておらず、毎朝無関心な点呼を聞かされて、友情から誰も助けてくれず、如何なる困難な行動も無いのです。モロッコ人の狙撃手の服を着たこの人物は、少なくとも彼が信じた取り消しのきかない運命と同時に、自分自身の意志によっても取り巻かれていたことを彼は知っていました。その魂の誇り高い部分が、偉大な権力を夢見ているにしろ、あらゆる人を軽蔑しているにしろ、永遠のものとして面

目を施しているにしろ、単に死すべきものとして面目を施しているにしろ、まさに常に困難で危険な場所の方へ発射することに彼は傑出しています。最も控え目で最も高慢なものがその時は同じ理性を見出すのであり、近づくにつれてそれらの理性が大変に弱いものに見えて震えるのです。その何ものかが、多くても五つか六つの文章を私に創らせる声となって響きました。修道女になったかの如く私には思われます。私は全体が美しいのを考慮します。でも、他にはどんな風にやるのでしょうか。普遍的な恐怖は、戦争の下らなさを説明しません。というのも全ての人々が我々の道徳家たちの中で、最も果敢な人が行くのと同じ位に遠くへ逃げ去るのを妨げることを、私はあなたに求めるからです。私とその動きを軽蔑したことは謝ります。平凡な当事者も同様に、まさに復讐しなければならないのです。（完）

（1）ニコラス・ロストウは、トルストイの小説『戦争と平和』の登場人物で、青年士官としてアウステルリッツに従軍し軟弱であったが、軍に馴染んで成長して行く。

第四章

私は銃後に遠く戻らなければなりません。何故なら時間の唯一の糸が思い出と、それと同じものが最もくっついた観念を取り上げるからで、私が現在求めているものでもあるからです。私たちは悲惨な生活をしていました。胃はねっとりした液体に漬けられた薔薇色の繊維質の肉を拒絶しました。三一軍団司令長官からの伝令たちが現れた時に、私には大きな変化が突然にやって来ました。彼らは日中に、そして時々夜間に、通りの向こう側の屋根裏部屋にあった、防衛担当区域で最も美しい監視所に順番に仕事を与えにやって来ました。これらの騎兵の下士官たちは競馬関係者たちで、富裕で贅沢な生活をしていて、卵や葡萄酒やコニャックの様な忘れられた品物を荷車の中に持って来ました。私はお金の使い道を再発見しました。私たちは借金を返しましたが、二つの椅子と一つのヴォルテール風の肘掛椅子を備えて一人の会食者を結局は落ち着かせました。植民地人の砲兵であるランドリーは、これらの品物の主な職人でした。彼は褐色の肌をしていて、陰険に笑いました。村の廃墟の中で、彼は人々が望んだ品物を何でも見付けて来ました。彼の最初の商売は、未だ熱い儘の砲弾の破片を新入りの若者たちに持って来ることでした。実際に熱くて手が火傷する程です。しかし、それはストーブの後ろで保存するものでした。近くで爆発がある度に彼は走って行き、そして戻って来ました。或る日、優雅な監視手たちの一人が、森で捕らえられたと言われた若い猪たちのことを話していましたが、その一頭を手に入れるために何かを与えたいとつけ加えて言いました。ランドリーは言いました、「あなたは十フラン与えませんか」。〈市場〉が決められました。そして翌日、子供の猪が一頭荷車に乗せられました。部隊の配置に就いていた人々とか、農民とか、樵たちは、野生の猪の群に数人で包囲して、若い動物にどすんと落ちる術を大変良く知っていました。恐るべき猪の雌にも決して問題にしませんでした。その様にして参謀部の人や犬と同じ様に馴れた何頭もの若い猪たちと遊びました。私は、人間が実際に動物たちの王であることを分かり始めました。

私は森の人間たちに余り会いませんでした。しかし、彼らの中には友人たちがおりまして、樵の幸せな一日が思い出されます。私たちは一般的に、ホップを絡ませた支柱を 進入禁止の斜面に夜間取りに行き燃やしましたが、柵の支柱とか大樽や戸棚の破片、ついには略奪し得た物は全て同じ様に燃やしました。進んで賢明になっていたT大尉は、ホップを絡ませた支柱一本が二十フランの価値があり、私たちは畑荒らしをする者であり、終わりにしようとしていることを私に説明しました。「あなたは樹木から森林までを探しに行きます。前方には二輪の荷車があり、左方には監視所があります。それを偵察しに行ってください。あなたは二頭の馬を手に入れて、その夜には御者になり、翌日には樵になるでしょう」。彼は私を走らせて気に入っていましたが、彼は正しかったのです。探検が好きだったル・バルビュは、私と一緒にその二輪荷車を偵察しにやって来ました。私たちは用意されていたかの如く幾らかの砲弾を持っていました。しかし、私たち二人の班は良く命令されました。私は道を選びました。夜には馬車に乗りました。翌日は現地人を探しに行き、彼らにラム酒の小ビンを見せながら、大変に良質のエリキシル剤の薬は樹木を伐るためであると私は彼らに言いました。この種の冗談は軍隊のもので、しかし私はそれ

を古代風で殆どイソップの寓話だと感じています。奴隷制度は至る所に貧弱な花々を生みます。その日の後で、その間は上官の声が一度も聞こえないのですが、私は材木で一杯になった荷馬車を護衛して道を進んでいました。そしてマンドル・オ・カトル・ツールを目指して、荷馬車と私は二つに分かれました。一方がもう一方を探しに行くことは問題でした。何故なら私は頑固でもあるからです。私は幾つかの障害を通過します。馬たちの御者が気まぐれを見せて無防備の抵抗そのものであることを私は単に思い出しております。というのも私は未だ上等兵ではありませんでした。その後、一度ならず私が即興的に話を戻して創ったのもその時のことです。「あゝ！あなたはスープが冷めて、そしてこの戦争が大変退屈になると考えています。だが、それではアルザス＝ロレーヌ地方を誰が奪還したいと思ったのかを私に言って下さい。それではその点について話をした人々を誰が拍手喝采したのでしょうか。それでは恐るべき隣国の人を誰が罵ったのでしょうか。それは何時も私ではありません。そして、それはあなたであることを私は良く知っています。拍手喝采したり評価が上がることは楽しいことでした。人々は同意させられました。そして今、私が望まなかった戦争に参戦しているのは私です。でも、私に同情することはありません。戦争を望んだのはあなたであり、あなたは今、あなたの不平で私を打ちのめします。あなたは恐らく、戦争は歌になると思ったのです。ねえ、メッツへの道はあの高い処にあります。メッツへ行って下さい。さあ今です」。私は要約していますが、その声と言葉は、優雅で生き生きとした雄弁家ではなかったデモステネス⁽¹⁾を大変良く思い出させました。私はその度に勝ちましたし、別の時にも何度も勝ちました。私は材木を手に入れて、どんな時でも肩の上には幹の跡がありました。私は待ちながらもう一度、私の言葉を全て温めました。私が言った範囲では非難が無くもなかったのです。何故なら、結局のところ私は拍手喝采しなかったからですが、口笛で野次することもなかったからでした。私はバレス⁽²⁾好みの喜劇俳優を全てその儘判断して軽蔑したのでしょうか。そして、私の修辞学は農民や労働者たちを十分に救済したのでしょうか。同様にアカデミー会員と政治家とジャーナリストたちが大変静かに臆病になって罰せられずにいるのを私は予想し得たのでしょうか。私は認めますが、戦場は私の言葉にとっては自由でした。結局のところ後になって戦争の真実が見えて来ました。それは私たちの上を通過して行ったコウノトリの飛行と同様に、明らかであり必然的なことでした。

私はここで言葉を続けて、もう一度他の言葉で纏めますが、私が衝撃を与える決まり文句は先ず反論出来ない様に思えますから、何時も同様に簡単には通過しませんでした。情熱に溢れた或るモラリストはプロヴァンス地方まで逃げ出します。或る熱狂的なジャーナリストは少なくともトゥールまで行きます。首相はボルドーに身を隠します。彼らはそこから若者や頑健な者たちが善を見出すために配置されることが正しいとします。一人は殆ど自分の足に満足していません。もう一人は行進するには重過ぎます。三人目の人は年齢外です。しかし、それらは説得力の無い理由です。パリは包囲されるか、襲撃されるか、占領されると想定されていて、砲弾そのものを別にしても危険でした。人質の役割は笑い事ではありません。それでも私には占領された国の老人の話があります。老人は、もしも必要であったならば銃殺されるという予想と共に二四時間、一日中監獄で過ごしましたが、今度は彼の番だと毎週予想しているのです。最も尊敬すべき者がまさしく人質に選ばれており、そしてそこには健康も力も求めない戦うための一つの方法があ

ります。私はつけ加えて言いますが、もしも敵の面前で、人質であつてもなくてもどんな市民でも自分の部下を殺したなら、これは常にあり得ることですが、それは国が実際に克服出来ないものになっているのを知られる時です。私が話していた友人は、皇帝自身を殺し得る状況に一度か二度陥りました。彼は少なくともそのことを考えませんでした。市民は、例え彼の息子が軍隊にいるとしても、戦争は一つの職業と考えて、まさしく傭兵の時代と見做します。これらの考えは、歩兵のイソップの頭においては混乱した夢想でしかありません。もしもこれらの考えが形を成して市民の道徳になったとしても、私は平和が絶対的であると言いません。何故なら父親が自分自身の言葉で単に強制されると、忽ち息子よりも勇気が無くなると考えるのは正しくないからです。勿論、戦争にも少なくとも一つの良識があるでしょうし、時々父親が息子の前で死ぬでしょう。それが順番であるからです。

この話に至るために私が樵の話を書かなかつたので、あなたは私を疑っているかも知れません。十分にあり得ることです。私が兵隊としての考えを包み隠すことには何の正しさもありません。私は、尊敬のしるしによる穏やかなプロポから、最大の自由を軍隊に見出しました。精神を空にするのは一瞬だけですし、プロポを書くことは自然な反応として継続して続けられました。戦争は眼の前にあつて急を要するものですが、精神は屢々湧き出しました。私は、観念を順番に置いて行く新しい方法を知りました。ヴィルトールという名前だつたと思いますが、不器用で鈍い人物である下士官が、私たちの上方の瓦屋根の下でランブクールの方を監視していて、脱走話を聞きました。その結果、単に脱走することは難しいが、良く行われていたということになりました。その点について彼は大変静かに言いました、「私は加わっているので、この戦争から逃れない。しかし、次の戦争の時には連中は私に勝てないだろう」。この様に話していたこの男は、少し前方の窪地に隠れていた第七砲兵中隊を爆発音で覆った恐ろしい敵の一三〇砲兵中隊の発砲の際を窺いながら、瓦屋根の下に一度だけですが止まっていたのと同じ人物でした。大砲から煙が出てから着弾するまでの間が十五秒かかっていたので、彼はその度に電話で知らせていました。「避難せよ」。十五秒間に多くのことが行われます。しかし、少し長い一撃が瓦を飛ばしたことがあつても、敵の砲撃に関しては驚く程に規則正しく行われることを私は何度も見ていましたので、彼は信頼して止まっていました。ゴンティエも又、神秘的な軍人でも何でもありませんでした。一五〇砲兵中隊に眼には眼で砲火に応戦する前には、同じことを行いました。以上のような事例から私は、クローデルに発見したこの言葉を少しは理解しました。

「義務とは、少しも疑いの無いものに基づいた数々の身近なものである」。この様な文字になっていないとしても、十分に意味があります。そして、その人間の更にもっと近くでは、勇気を必要とすることや更に手に入れることを私は疑いました。それは〈祖国〉に対して言われる曖昧な義務ではありません。それは全ての目的に役立つものですが、一つの役割に結び付いた一定の義務であり、直ちに効果的に援助することが重要である危険な状態にある仲間たちに対しての義務なのです。それは、自己に対して大変に緻密な義務で美しい羞恥心によって大変に深く隠された義務を除いて、困難な中へ進んで行きそして恥ずべき恐怖に逆らう処まで試みるのをその者に強く命令するものなのです。動けない負傷者たちの傍らには看護人たちが大変立派に止まっていますが、何人も殺されたので明らかに危険であつたと私は言われました。私がそれを全て信じた

のは当然で、それを信じることに何の苦勞もありませんでした。もしも恐怖が蝕み始めたなら、用心深い動きは大変に自然で賢明でさえありますが、軽蔑すべきものになることに私は気付きました。意味合いは微妙なのですが、それは諸行動によって見抜かれるものです。私はここで人が語ってくれたギヌメールのことを書かねばなりません。ギヌメールは負傷して治療期間を送った後に、戦闘機による戦いに戻りました。彼は、習慣としていた如く、最初に攻撃しないで空中で機銃掃射される儘でいました。下の方から見ていてびっくりしていた人々に彼は答えて言いました、「私は負傷した後に、大変な臆病者になっているかどうか見たかったのだ」。あのプルタルコス⁽³⁾の行いは伝説的になっていて、伝説の様に嘘でもあり、真実でもあります。一つの観念に似ている彼は、私たちの混乱した動きを明らかにしています。その様な感情によって英雄は立ち直ります。しかし彼には、自分よりも賢明であったりそれ程までに有名であったりして全てに足りる者たちに従うに違いない者の眼から見て、権力者たちの教訓を望む様なことは全くありません。私は、屢々混乱しますが、常に自由な議論の中でやっとのこと生まれた話を形あるものにしていくのです。（完）

(1) デモステネス（前三八四～前三二二）は、古代アテナイの政治家・雄弁家でマケドニア軍により失脚し自殺した。

(2) モーリス・バレス（一八六二～一九二三）は、作家・政治家で自我の探求から出発して国家主義へ向かった。

(3) プルタルコス（五〇頃～一二五頃）はプルタークのことであり、古代ローマ帝政期のギリシア系歴史家・伝記作家で、「対比列伝」（英雄伝）の作者である。

少年時代の様に楽しい時もありました。そして一つならずの情景が、偉大な喜劇となって私に照らし出しました。ここにあるのは写真による歴史です。ゴンティエは写真の芸術家でした。私たちの隣に何時もいた第十四連隊・タルブ砲兵中隊の或る上等兵は、無邪気にも婚約者のために自分の写真を撮りに来ました。ゴンティエには一つの考えがありました。彼が芸術の技術を除いてあらゆることを教えていた男がランドリーでした。そして、彼はその上等兵に言いました、「私は素人でしかない。しかし、その人は本物の芸術家で、プロの人間だ。もしもあなたが興味をお持ちなら、最も美しい肖像写真を手にするだろう」。ランドリーも良く聞いていました。しかし上等兵は帰ったために、話は進展しませんでした。ランドルミーは言いました、「あなたは暗い時に、肖像写真を撮りたいのですか。あなたは黒人になりますよ。あなたの婚約者は黒人の婚約者じゃないですよ」。相手は逃げ帰って仕舞いました。日中に彼と再び会いました。ランドリーは言いました、「光は十分にある。あなたは死人の様に白くなるだろう。彼女を泣かせたいのですか」。しかしながら戦闘に就かなければなりません。ゴンティエは所謂写真家にシャッター無しの小さなカメラとシーツの布切れを与えました。「かちっ、かちっ、と鳴るだけで、写真の音以外のものはもう動いてはなりません」。ランドリーは、城の横で撮るために立ち去りました。しかし彼は気長な顔で戻って来ました。「私を気にしているのは上等兵ではないですよ。彼は正面の顔と横顔のポーズを取りましたし満足しています。しかし、彼は私が撮るのを見ていて同じ様にお金を支払う約束をして、撮るのを注文した歩兵隊の将校なのです」「もう動かないで下さい。そして、かちっ、かちっです。しかし私は暑く感じましたよ」。これはランドリーに言おうとして僅かな時間続いた演技でした。「私はあそこであなたを探している歩兵隊の将校を見ましたよ」と私は言いました。私たちはその後、上等兵にも将校にも再会しませんでした。このランドリー自身は蒸留器を備え付けて、地下室に多量に漬けてあったプラムで蒸留酒を作る方法を発見しました。それは敵が残したものであり、私たちが静かにしているための何回かの一斉砲撃の代わりであると彼は言っていました。私は最初の一杯を飲む栄光に授かりましたが、それは部下をひっくり返すためだったのです。私がおその日に、そしてその後にも知ったことは、アルコールは恐怖を癒やすことです。

この生活は少しも軍隊らしくありませんでした。しかし、爆撃は普通にありましたし、交差点での何時もの五時の空砲もありました。その歩兵たちは、私たちよりも用心していませんでした。彼らはオペラ座広場で自惚れていたのだと私は推測しています。あちらこちらに災難があり、人間で一杯の納屋の中での大虐殺も二、三件ありました。これらの恐怖は電話交換兵の士気を上げることはありませんでした。私たちは二階や、薄い壁の後方や、亀裂だらけの屋根裏部屋の方へ追いやられました。そこで私は、蒼白い眼をしていて比類無く素朴な老人の新司令官その人と知り合いになりました。彼はあらゆることに無関心な様子をしていましたが、例の挨拶は別でした。彼が、この危険な場所に落ち着いた私たちを見た時、彼も又そこに住居を定めました。私がお彼にサイン用の書類を渡した時、屋根裏部屋に爆発と爆発音が反響し、ドアが破れ、激し

い煙で私たちは投げ出されました。私は助かったのかどうかも分かりません。しかし、彼はサインをしている最中でした。彼も又、痩せた厳格なヤンセン派の人で中斷することなくサインを終了して、保留した儘にしませんでした。その後、私たちは殆ど友人になりました。ドイツ軍の七七ミリ砲の薬莖と比べて我が軍の薬莖が巨大なのを私に教えてくれたのは彼です。彼は言いました、「我々は煙の出ない火薬を探したのだ。そして、それを発見した。しかし威力を犠牲にしているのだ」。実際に敵の大砲が六キロメートルの処にあっても、吹き放す煙で比較することが出来ました。ゴンティエが言った様に、一門の大砲がある場所を見付けて、それを壊せるかが賭けになると思うのは重大な誤りです。私はこれを問題にしているのでつけ加えて言いますが、煙は夜や昼でさえも発砲の大変正確な目印になります。発砲の場所を分からなくすることは有利になるのです。我々の大尉は、煙が出る古い黒色火薬を夜の発砲に使用する考えを持ちました。昼間に彼は、敵の視界に入らない小さな谷に大砲を移動しました。そうして黒色火薬での発射は調整が行われました。夜には調整後の煙の出る発砲を移動して行いました。彼は技術者でした。しかし私たちにおいては、何時も無視されている砲兵の仕事の役割があるのです。私は他のことを考えてそう信じているのですが、それは砲弾が落ちた場所を近くに見に行くことです。遠くからこれらの調整を行っても屢々果てしないのです。私もそれらの仕事に時々参加しました。私には一つの考えがありましたが、受け入れられませんでした。一発が発砲されます。落下を観察し、長ければ短くされ、短ければ長くされます。数々の偶然から際限無く続けられることもあり得ますが、発砲距離は恐らく十分に点検して行われます。照準を変えずに少なくとも六発発砲して、平均の落下地点に従って調整しなければなりません、幾何学的に作図するのは大変容易です。でも、それは恐らく決して行われません。正確な発砲が期待されます。そして、それを発見した時、「調整は終了した」と言います。しかし、発砲の何を証明しているのでしょうか。私は、理工科大学校の教育が何の役に立っているのかと自問します。彼らは一つの考えも最早決して養成しない点で、厳格な学習に対して疲れているのではないのでしょうか。あるいは寧ろ、彼らが先生たちを受入れたのを私は見たのですが、命令するコツや服従する術策によって完全に自分のものにさせられたのでしょうか。先程私が結論としたことと同じ結論に私は戻ります。私たちには国家防衛のことが語られますが、人々は私たちを嘲笑します。実の処、主人と奴隸の古代の戦争が重要であり、そこでは主人は決して間違っていないのです。

厳格なヤンセン派のこの司令官は、或る日私がまさに七五ミリ砲の砲兵中隊に意見を伝えただけの時の人物です。彼は言います、「あの時あなたが信じているのは、彼らが非常に長めに砲撃していると伝えられるから、何らかを変えるだろうということです」。そこで私は答えました、「私はあなたが不確かなことしか思い描かないことを忘れました」。これは術学的なものでした。そして彼が私に良く答えたかも知れないのは、人は自分の意志だけによって支えている希望以外に希望は無いということです。彼は何も答えませんし、それからより一層静かになりました。その上、彼はその後間もなく私たちから去って行きました。私はこの大変に素朴な上官のことを話して来ましたが、しかしながら、司令官に許されている素朴さは、恐らく大尉には無いことを忘れてはなりません。それは殆ど全てを決定し、殆ど全てに答えるものであるからです。これは宿営地で大佐が時々父親らしくなったり、何時も將軍でいるのと同様です。しかし大佐も将

軍も、殆ど私たちの問題ではありませんでした。

私は中佐の訪問を思い出します。それは私の中に大いに拘っている一つの考えを目覚めさせます。私は文書を十分に保存していません。仕方がありません。私は市民兵の経験を通して読者であるあなたを自然に導きます。寓話には一つの道徳がなければなりません。ところで私は或る日のことが思い出されました。私を待っていた或る中佐に、私は交差点で出会いました。将校たちはもう少し遠くに集まっていて、秘密の対談を観察していました。彼らはあれこれ奇妙な推測をしていたかも知れませんが、私が言われたことは次のとおりです。一番目は、中佐はベルグソンのことを話しましたが、私はベルグソンのことは知らないと答えました。私はベルグソンについて話すのが好きではありません。ベルグソン哲学の信奉者たちと私たちには門下生同士の競争があります。二番目に、彼は中立のベルギーへの不法侵入に関して私が考えたことを尋ねました。それは、私が今でも信じていることですが、戦略の全ての流れにおいて二十年前から告げられたそれなりの軍事策略であったと私は彼に答えました。その点について彼は、私が大変誠実に兵役に就いていることを感謝していました。そして、これで全てです。多分、聖戦を説くために私は少しは当てにされていたのです。自然な動きとして私は、先ず宣伝業務を伴う全ての繋がりを切りました。そして、今日ではそのことを嘗て無い程喜んでいます。何故なら大戦前の数年は我が国の軍人たちに同意した外交官たちが、ドイツ軍の配備がその必要な動きを齎す様な場合のために、ベルギーによって攻勢への用心を準備していたことを、今日私たちは記録によって知っているからです。もしも私が侮辱された道徳の名において、明らかに実力行使の侵入に対してその当時に反対していたなら、今は本当に自慢して当然だろうと思います。しかし、政府の偽善と呼ばねばならないことを最早考慮しないで、いずれにせよ戦争が道徳を侮辱すること、そして子供が非常に驚くことを私は少なくとも知りました。しかしながら私は、隠れ家で熟考し、そして不用心に思想を使う人を思想がもう一度噛み付くのに気付くための時間を持ちました。私が考えたばかりの考察は、問題を少しも終わりにしていません。そして私の教育のために、議論するのが非常に上手な想像上の幕僚長を私は作り上げました。彼は或る日私に言います、「何故あなたは有益な意見を軽蔑するのか私には分からない。もしも敵に対して協定に違反することが許されるなら、嘘をつくこと、躊躇すること無く自分自身で大変上手に行う行動には、懲戒することも許されているのである。その嘘が有益であるかどうか、そして最も破廉恥な嘘が最も有益でないかどうかを知ることが少なくとも重要である。例えば私たちが、捕虜たちを虐殺しないことを人々が知ることは有益である。何故なら、私たちは敵の中にも又、彼らが生命を救済するために赴くことが出来るという観念を、その様にして伸ばすからである。しかし敵が捕虜たちを虐殺すると信じさせることも有益である。というのも、包囲された我が軍の仲間たちはその時、捕虜になれば虐殺されるので最後の最後まで防戦するに違いなく、それは我々が願っていることに違いなからである。そして、あなたが祖国のために死ぬとするなら、祖国のために嘘をついて恥じるのを、私はどんなに躊躇しても理解しないのである」。そこまで自分の思想を導かなかつた者は、自分の気に入るものを思想と呼ぶことに私は疑います。戦争は人間を素っ裸にします。彼は辛い思いをしてイソップの思想に戻ります。ソクラテスは自分の思想も又、権力に従うのを拒絶したために、大変確実に刑を宣告されました。私たちは恐らく、ソクラテス以来全然進歩しません

でした。恐れないこと、節度を保つこと、何も信じないこと、これが独裁に反対する三つの方策です。幾人かの人々はその様に定めて公的精神を生じさせていますし、それで十分です。戦争や権力の濫用や非常識な富の集中の如き人間の誤りは、学識が深いと見做されている人々の信じ難い盲目によってしか可能ではありません。過去の虐殺によって自分の判断を形づくることは重要です。他に英知はありません。

この物語を思い出してみましょう。丁度、私たちがいる頃に、一九一五年の初めですが、スパイ話が幾つもありました。その嫌疑は身を守るのが難しい病であることを私は知りました。ドイツ軍の或る将校が、我が軍の前線を歩兵隊の中尉に扮して探っていると語られていました。彼のことで分かっていたのは一つだけでした。それは将校が被る庇付きの帽子に番号が付いていないことでした。或る冬の日には私は、砲兵たちが非常に恐れていた場所であるジュリーの森を監視する任務に就いていました。電話交換兵も自然と交替で歩哨に立たなければなりませんでした。従って全員が監視することを覚えますし、電話することを覚えます。誰も予想しなかったこれらの戦場での状況は、どうにかこうにか組織的な形態を取っていました。ル・バルビユ中尉はバルコニーにいましたし、私は避難所前の溝の中にいましたが、その時に或る将校が質問をしながら土手を飛び越えて来ました。「ここには七五ミリ砲の監視所はあるか。どんな砲台か」。私はこれらの質問に決して答えてはいけないことを知っていました。彼は素っ気なくて急いでいましたが、私は非常に冷静でした。私は何時もそんな小さな事件を少し楽しんでいました。両眼を上げながら少なくとも私は、番号の無い庇付きの帽子に気付きました。精神には、これらの出会いに対しては力がありません。私は、そこから遠くない処に凭れ掛かっている斧のことを考えながら、ホメロスの様に彼の頭を割ろうかどうか考えていたことを白状します。そうしている間に、私は考えをその将校へ戻した時には彼に道を教えていました。彼は突然に反対側に姿を消しましたので、私は嫌疑を確認するだけでした。私は自分のためにもこの話を黙っていましたが、それで良かったのです。翌日、歩兵隊の一人の斥候がポーモンの前を走っているのを私は見ました。すると皆が興奮しました。スパイが追跡されていて、捕まりました。実際に逮捕されると、彼は名前を名乗りました。彼は我が軍の歩兵隊の中尉でした。その時に言われていたのは、まさに將軍の息子だったのです。しかし、人々が言っていることは全てが間違っているという原則を私は発見しました。

私たちの遙か後方の森の高い処に、時々照明弾が発射されました。更に私には時間と、棒で一直線にする方法から場所を出来るだけ書き留める任務がありました。正確で忍耐強いこれらの仕事は、私には良く合っていました。調査が行われ、〈眼に見えない人々〉と呼ばれた人々の地方においては試みるのが重要でした。何故なら、或る日〈軍団〉の敗北を探しに行った時に、全員がホライゾン・ブルー⁽¹⁾の軍服を着た軍人たちを私は発見したからです。兎に角、私たちは黒又は濃い青の服を着ていました。そして、この奇妙な状況は夏まで続きました。これらの色は黒い服の二人の兵隊から離れたドイツ人捕虜を見分けるには、重要であり得たと同じ日に私は認めました。千メートル以下の処で彼は消えました。他の二人も彼を見失った様に見えました。従って私は、〈眼に見えない人々〉の側から、後方へ向かったの謎を探すのを中断しました。しかし話は他にもありました。彼はポーモンで三人の市民の処に止まっていたいました。何時も横になっ

ていた祖父と、介護をする祖母と、せいぜい十二歳に見える孫娘です。ところが砲手たちは、顎髭を生やした大きな老人が下方にある砲台を探索しているのを夜に見たと言っていました。良く導かれた幾つもの発砲は、想像しても怖がらせました。麻痺した中風患者は仮病だったかも知れませんでした。そして、その家の位置がランプによって、敵にとっても目印になることは可能でした。事態は事実として受け取られました。スパイの中のスパイがここにいるのですが、全く自然な成り行きでした。というのも班の何人かはそこに泊まっていたからです。一頭の雌牛もそこに残されていました。私は単にそこへもう少し進みました。私はカフェ・オ・レと地図の一部を認めました。中風患者はベッドから離れず、窓にはどんな光も輝いていないことを私は確認しました。間もなく一台のトラックが到着して祖父母と孫娘を乗せて行きましたが、些か涙も流していました。それから彼らの家は、他の家と同様についに略奪されました。砲弾はその家に少しも当たらなかったのは事実です。そして、この偶然は明らかになりました。見えないものを信じることを如何に自ら禁じれば良いのでしょうか。

今度は、ゴンティエが感動する番でした。ところが事は私たち二人に止まっていたましたが、実際には重大でした。我々の第三砲兵中隊の或る曹長は彼の上ではなく、後方の、彼が通り過ぎた監視所の一つ一つに砲弾を引き付けていることにゴンティエは気付きました。この曹長は私たちの仲間ではありませんでした。そして彼はいい目を見ていたのです。ゴンティエと私はそのことを、私たち自身を嘲笑するまで非常に真剣に、まさに私たちの身を守るつもりで語り合いました。しかし、もう一度偶然が良き劇作家になりました。或る日の午後、私は電話交換手の私の椅子の後方で、将校たちが揃うに至ったのを見ます。私の方を見て少しの間躊躇していました。そして次に大変注意深くドアが閉められ、少佐が私に言いました、「あなたはこれから一言も決して聞いてはいけません」。私は忠実に約束を守り、今でも未だ守っています。しかし重大なことは、秘密であることが重要なのを私は良く理解しています。単に起こったのは次のことです。やっと議論が始まりました。誰かがドアを激しく動かして開けさせました。主張したことが受け入れられた様に私には見えました。それは問題の例の曹長でした。私は大変に無分別な考えが、その点について私自身の裡に生まれました。そして、この第三砲兵中隊は永遠に分隊から去りました。そして私は最早、私の小説話のことを考えませんでした。

あらゆるスパイ話について或る日、T大尉と一緒に考えながら私はついに確実に納得のゆく一つの考えに到達しました。私たちには村の外れの或る屋根の下に優れた監視所がありましたが、多分敵からは少しも見えません。そこはスパイに対しても大事な秘密の場所でした。ところで、その監視所は私たちが知り得た限り、壊されたことも狙われたこともありませんでした。その反対に敵は、一人の監視者もいなかった教会の鐘楼を狙っていました。この種の数々の指摘は全てのスパイ話にけりをつけます。スパイは何人もいると思います。私は、スパイの物語も何冊か読みました。彼らのやり方は大変に巧みで興味があります。しかし、それは頭で考えたことでしかありません。シュマン・デ・ダムでのドイツ軍の驚きやカンブレーでのイギリス軍の戦車攻撃の様に、重要なことはスパイたちに分からないのです。彼らが相手の秘密を暴いたことは断言されています。でも、私はそのことを余り信じていません。

これらの回想録は、大戦の最初の冬に関係しています。私がジュリーの森を知ったのも冬であ

り雪によってです。人々はメッツからフリレイへの道を進んでいました。そして、左側の低い森の広がりの方へ降りて行きました。最初に三三九隊とその調理台がありました。次には若木の雑木の森があり、何本かの樹木と一緒に小石だらけの塹壕と針金で一杯でした。そこには大きな金網が作られていて、家禽の放牧場の様でした。私は時々そこで道に迷い、避難所を探しました。森の中での砲撃が、樵が仕事をしている様に鳴り響いています。電話交換兵は、そこでは屢々一人で電話線に伝って行き、切れているのを見付けます。元気付けてくれる援軍は全然おりません。従って砲兵たちの避難所はまるで楽園の様なものでした。思考するためには、この避難所が妨げになるものは何もありませんでした。そこは何本もの枝の上にある僅かな地面に過ぎませんでした。酷寒のパリで見られた様に、そこでは焔炉の中でコークスが燃えていました。そこから溝を歩いて十メートル行くと、森の外れの一種の監視用バルコニーへ到達します。そこからは下方約三百メートルの処に、不気味な森であるフランス側のルミエールとドイツ側のラ・ソナールの間にある草地が見えます。この草地に二本の塹壕が進み、二本のうち的一本には我が軍の歩兵たちが眠っていますが、早い意味が倒れているのです。これらの死体を数えると二百体以上あると私は思いました。二時間の見張りの間に、私はそこで奇妙な考えに襲われました。この草地を横断しようとしていた若者たちをどの様に運び出すのでしょうか。彼らには大変な名誉がなければなりません。そして実際には昔のスイス人たちも、どんな君主でも構わずに任務として全く同じことを行っていたのです。集団の精神、先輩の模倣、行すべき事を行わない怖れというものがあります。それらは危機的な時には恐怖よりも強いものになるのです。それ以来、私は「野営地にて」を表題とするシュランベルジュの報道や「ポーランの勤勉な軍人」誌に、この感情が良く表されているのを発見しました。もしも時々には十分に決然とした行動を是非とも必要とする勇気を持つ様に、常に考えさせる軍人精神を私が持っていたなら、私が知る限り、他にもないこれらの二つの作品に私の真の肖像が発見されることでしょうか。そして私には、ノートン・クリュの莫大な編纂を一行ずつ読んだ全ての人々の様に、文学としても十分に情報が与えられています。しかし私が話しているこの素直な感情が、それらを受容する殆ど全ての人々を知らないこともあり得ます。行わずに待っている人々のものである恐怖や憎悪の時間を思い出すことで、人は寧ろ思考します。そして恐怖がその時の私を支配した様に、恐怖がその時を支配します。避難所を探しながら私も、雉子や鶏の様に金網にぶつかりました。全く動物的なこれらの行動は、戦争の原因を何も説明していません。これらの孤独の時間に私は『マルス』の数々の章を書きましたが、それらは枝葉末節を完全に抜かして、自分自身の勇気に基づいて人々の注意力を連れ戻すことをより一層重要と判断して、軍隊の奴隷制度とその続きである節度の無い醜悪さの主な原因を書きました。私は、右翼に弾丸除けのあるバルコニーで、ヒュウヒュウという沢山の砲弾の音とバチツという弾丸の音に忙しくすることも無く、監視兵の仕事を手早く行うことだけを考えていました。そして、どんなに嬉しかったかを私は思い切って言いますが、私がメズレイの砲兵中隊の四点の火が点いているのを見た時、それに基づいて直ぐに我々の角度測定器具を向けました。次にバルコニーの手摺に凭れかけて、接近する四羽の鳥の鳴き声を聞くために約十二秒待ちました。鳥たちは上空を通り過ぎ、森の中の空中に響き渡りました。ル・バルブユ中尉は、その時が砲兵にとって重大な時間であると言いました。その時に、この大砲に合致した我が軍の砲弾を持って

来るのを測定しているのが見られました。少なくともそれは信じられていました。距離を百メートル誤ることは、謂わば無駄になるのです。その反対に何発もの銃弾を受けるだろうと推測した者には、それは安全になります。空想的に理解して下さい。何故なら偶然の最も奇妙な銃弾も、最後には事が起きる様になるからです。私はフィレイでこの種の偶然を電話で聞きました。鋼鉄で覆われた監視所が重要でしたが、それは監視所のための二本のレールの中に、一本の溝も一緒にありました。私は最初、負傷していた電話交換兵の識別し難い呼び声しか分かりませんでした。間もなく次のことを知りました。労働者たちが監視所の前方を通過するのが見えましたが、彼らは通常の時限弾を四発そこへ送っていたのです。それらの時限弾のうちの一発は、空中で爆発しないで、照準眼鏡と着弾観測将校の頭を奪い、避難所内を爆発して、まさに溝を通って行きました。ヴェルダンでは飛行士が、頭の無い弾着観測将校を連れ帰ったこと、そして彼の意見によれば砲弾に出会ったのは、空中をあちらこちら回っていた我が軍の砲弾の一つであったことが語られました。この問題の議論から、ゴンティエもその他の技術者たちも一緒に本当らしいことと、疑わしいことについて一つの考えが生まれます。私が言ったのは次のことです。私たちの感情に殆ど答えない者、そして如何なる成功も掴まなかった者は、私の頭から正確に一メートルの処とか、百メートル五十センチメートルの処とか、あるいは一定の他のどんな距離の処にもある一発の砲弾も又、まさに正確に私の頭の通過と同じ様に疑わしいものであり、又本当らしいものでもあったのです。要するに発砲は完全に疑わしいものであると言うまででしか無く、絶えずそういうことにしかならないと私は結論を引き出しました。三人の友人たちが自ら求めなくても、まさしくコンコルド橋での出会いには如何なる可能性があるのでしょうか。そうなのです。勿論、彼ら三人の友人たちが存在しているのは、彼らの人生の各瞬間に何時も確かな三角形を形成しているものであり、その角度と側面が独特なのです。この三角形にとっては如何なる可能性があるのでしょうか。この観念は、取分けそれらの可能性の段階が私たちの想像力の中だけにある時には、遠くへ導いてくれます。それは物理学者の先生たちを少し笑わせるまで、物理学者の徒弟を導くことが出来るでしょう。しかし俗悪な言葉を繰返し言うのは如何なる偶然か、これらの頁が少しは技術者以上の精神によって、あるいは技術者によって注意深く読まれるのは如何に弱い偶然か、これも又同じ言葉なののでしょうか。しかしながら、この偶然は私の真実の偶然です。そして私が何か出来るとするなら、それは抽象的な精神と、常に大いに信じたり納得させたりする傾向のある制作者を立て直すことです。私が最良の人々の中で私の論争的な諸観念に、それらが私の中で持っている重圧を与えるに至るのは大変に遠回しのこの奇妙な道によってです。遠慮の無い二、三人の弟子は、全て私が希望していることです。でも、実際は完全に希望していないのです。私が存在し得たものが私なのです。そして全員が健康です。そこには監視所の真の思想があります。

或る夜に、B少佐が我慢強くなかったのを私が知ったのは、そのバルコニーにおいてです。彼は電話をしていて、そこで私と会って非常に満足していました。何故ならエッセイという町をきれいに焼き払わなければならなかったからである、と彼は私に言いました。私は見詰めている場所を知りました。私は砲弾が通過する音を聞きました。でも、我が軍がフランス人であっても、焼きに行った人々を私は殆ど心配しませんでした。この種の観察は兵隊の心を打ちません。単

に私は炎が上がるのを待ちましたが、何も見ませんでした。「エッセイが何処か、あなたは良く知っていますか」。彼は地図で説明しました。結局、彼は中尉を呼び寄せました。彼も又何も見ませんでした。私よりも身を守るのが上手なのは確かです。このB少佐は、監視所へ来たことが一度もありませんでした。私は理由を尋ねます。それで、そこに来ないとすると、その理由も私は尋ねます。彼は、そこで人が見たものを知りたいのだと言いました。どんな戦争も見識の無い長たちによってその様に行われるのですが、知識は信じていました。私がここで分かるのは、恐怖よりも自負の方が多いことです。一人ひとり自分が望んでいるものを信じていますし、B少佐は一つの見本でした。かくして彼を喜ばせるためには、我が軍のベルタ砲が発砲する度に、腕や足が飛び上がるのが見られたと言わなければなりませんでしたが、その正確な太さは二二〇ミリで、せいぜい五キロメートルの射程でした。人はそのことも彼に言いました。同じ理由から調整工の上等兵は、「分かりません」と答えて長を激怒させないで「大尉殿、命中です」と、外の言い方を知らない有名な南仏人の様に言うのが得だったのです。以上は、如何に大砲を発砲するかですが、ゴンティエが言った様に、それは敵に対して更に大変な危険もありました。この問題について、私はここで将校たちが知らないことを書きたいと思います。夜間の砲撃において最後の斉砲撃は、何時も全て狙いを高く定められます。つまり定められたどんな距離よりも向こう側の遠方です。それは「獣医の砲撃」と呼ばれています。私は、我が軍の砲台のことを話しています。それは九五ミリ砲ですが、大変に丈夫で、七五ミリ砲よりも確かに正確で、射程は九千メートルであったことを私は言ったでしょうか。これらの砲弾は一二〇ミリ砲や一五五ミリ砲の砲弾の様にメリナイト(2)を全て詰め込んだ薄い鋼鉄の薬室で、私は誰の発明か知りませんが、細長いこの砲弾によって怖れられていました。この技法はその後、敵に模倣されました。ピクリン酸爆薬の爆発は、如何なる砲弾よりも優る速度を鋼鉄部分に伝えて、この斉砲撃は恐ろしい程に有効です。我々は、鉛を平らにしたものの中に何列も沢山並べた球で出来た砲弾で一杯にしながら、一度ならず一般的な砲兵のやり方を笑いましたが、それらの榴散弾は砲弾の速度に過ぎず、直ぐに失速しました。これらの成果は空中で炸裂する時限弾の時には僅か滑稽でしたし、着発弾の砲撃の時にも何にもなりません。時々爆発した円錐の底には数々の球がありました。そして、そのことは容易に予測されましたが、機関車に風切りを設ける人々(3)は何でもやりかねないのです。

ジュリーの森の避難所で、私は注目すべき戦争人間で、墓掘り人の仕事をしているジャンナンと知り合いになり始めました。既に彼には気付いていました。大尉が優しくも無く、厳しく取扱っていたことにも私は注目していました。彼は読み書きを習うことへの驚くべき執拗さで有名でした。読むことを覚えるのは大変に困難であると思わなければなりません。この問題に大尉はこう答えます。「ジャンナンよ、新聞に何が書いてありますか」。「私は分かりませんが、読みます」。彼は薪を割る様にして少しずつ読みました。でも、この非識字者は敵の砲台、飛行機、危険地帯、斉砲撃の時刻と継続時間のことは誰よりも良く知っていました。彼は砲弾が作った穴で洗濯しました。そして、あなたはパリで着ている様に白くなったワイシャツを見せてくれるに違いありません。戦争の危険を脱して復員した彼は、平和になってから或る時、車の中で自殺しました。私は従って彼のことを全く自由に話すことが出来ます。彼は大変に偉大な人でした。

土木工事人として家を建て、取分けテラスの職人でした。赤毛の頭は有能で、優しそうではないが陽気そうな青い眼をしていて、額は考え事をしていることで凸凹になったと言われていました。しかしながら暴力がこれらの特徴を全て支配していたのです。そして彼は何時も私にバルザックのミシュ(4)のことや、宿命で定められた赤い糸を求めていたその首のことを考えさせました。彼は何時もの様に、真のブルトン人がそうであった様に危険の中でも平静でした。戦火近くの地面に腰を下ろしたこの未開人を、今は想像してみてください。そして襤褸(ぼろ)の軍服になっても可能なものとして纏まっていた。その横にはル・バルビュと私がいいます。もう一人の監視兵はバルコニーにいました。私たちはそこでは大変に平静でした。そして若者と老人の二人の生徒は、学校の騒動を語りました。ジャンナンが、不真面目なこれらの小市民たちに一種の怒りを込めて声を掛けたのはその時です。「そんなことを聞くのは不幸である。何も知らない私は単に読むことも知らないが、あなたの立場にあったら愚か者にならずに勉強した様に、私は大いに学びたかったのだ」と彼は言いました。ル・バルビュは又、ブルトン人でもあり、赤毛でもあり、赤毛では無いもう一人の者よりも少し若かったです。私は二人のこの英雄の間で楽しんでいました。彼らが二人とも係わった前線での恐ろしい地面の凸凹を私は会得していません。従って私の思想は常に解放されていて、私の怒りは頭によって歪められます。私はそのことを残念に思っていました。その思想を手に入れるには、兎の穴の中で冬の一夜を過ごさなければなりません。でも、両名が私を軽蔑しなかったのは私には慰めです。私が四七歳に近づいていたことに注目しましょう。そして、彼らは私の息子になれたかも知れなかったのです。私たちは状況により、そこでは必然的に三人とも平等でした。しかし私が最初に知り合った彼らは、私に年齢のことを思い出させました。それは彼らの最初の指摘でした。「あんたはここで、その歳で何をするのか」。私は特に老けて見える様ではありませんでした。しかし、人は何時も年相応に見ていると思わなければなりませんし、あなたは年相応に見えないと言う人々も従って最初の評価を訂正するのが真実です。私がこの年齢の問題に触れるなら、私がそこにおいて外の処にもいれたことを仮定しても、部隊の連中の眼には何時も眉をひそめるものであったことをつけ加えて言いましょう。でも、彼らは決してそう思いませんでした。ゴンティエは或る日、私のことに関するこの指摘に言おうとしていました、「あんたは年寄りに見えるが、上等兵と同じでは無いな。階級を下げられた植民地兵の曹長に見えるよ」。

ジャンナンは、私が親しい関係にあったWと共に、無二の戦友です。私は野営地の中で何人かの怒りっぽい人々には期待しませんし、最早再会することはありません。これは平等への試みだったのです。彼らとも親しい関係にありましたが、決してその試みを行わなかったと私は良く考えました。そして、それは私が彼らと同じ二十歳になろうと試みて終わりになりました。権力者が高齢者に恥を搔かせないなら、高齢者は何処でも尊敬されますし、大変厳密になります。ジャンナンは従って私の弟子であり下僕でしたが、私もこの状況を受入れました。このことは何時も完全ではありませんでした。夏の頃には激しい口論になりました。どの様なものかは次のとおりです。私たちの一員になった見習士官がやって来ましたが、彼は大変に不規則なこの小さな兵士隊の責任ある長でした。この見習士官は、若くて礼儀正しい小市民で、勇敢で、熱心で、パリ中央工芸学校を卒業していました。私は彼の実力が軽蔑されない様に注意しました。ジャンナンは

賭博好きで、いかさま師でもあり、相手を引きずり込んでいました。そして少しずつ彼らは賭場を開き始めました。そして、夜のテーブルには見知らぬ者たちも引き寄せていたと理解して下さい。私たちが眠っている間に、タロットカードからバカラになり、よそ者たちは巻き上げられていました。私たちはそのことを知っていました。私はそれに手を出さず、見習士官も同じ様に手を出しませんでした。そうすると彼らはタロットのことを話したり、バカロで賭けるための対策がとられる様になりました。私も驚いた対策です。行動しなければなりませんでした。ジャンナンと相手は私たちの家から追い出されました。抵抗をしましたし、私も怒りました。私は既に上等兵でした。でも、そのことは殆ど考えませんでした。しかし私は、強制された服従が何であるのかを知りました。ジャンナンは怒りを冷静に変えて、私たちの家の背後にある無人の家で、砲弾を引き寄せるための一つの灯りと共に夜な夜な過ごしました。私たちを燃え立たせるための、干し草用の屋根裏部屋の高さにあるストーブの管を取り外しました。これらの事物は完全に私の得になる様に思いました。私は相手の人々に道徳を課する時には決して鼻に掛けませんし、何回も教わった格言からそこへやって来たのです。「道徳は少しも隣人のためにはない」。それ故に全ての人々は許されましたし、真の実力はその様にして見出されました。ジャンナンは馬たちの間に送られて、曹長にいじめられました。その後、彼も同様に許されたのを私は見ました。私は、羊毛で出来た金モールを全然考えないでいる或る人物に、一つの命令を出すことが二、三回起こりました。そしてその上、上等兵は殆ど重要ではありません。しかしその時、私は決して屈しませんでした。時々下位の者による脅威もありましたが、それは私を正しいものにする方法ではありませんでした。私には後悔がありました。そして要するに、私は何にでも準備するに至ったのです。そこから私はもう一つの格言を又引き出しました。「上官になるな」。この観念は将来のもので、強固で学識の深い人が沢山いる様になると、奴隷たちの間に取り残される様になる日にも、最早奴隷たちはいない様なものになるでしょう。しかしそれは私が書くに至るであろうCのための作品になるのです。ジャンナンはそのことをそんなにも長く考えませんでした。私は何時も彼を政治には完全に無関心であると見ていました。彼は見たものしか認識しませんでした。「それでは我々と一緒になっているイタリアは、イギリスのそばにある国ですか」(4)と尋ねるのが彼なのです。地図を描かなければなりませんでした。しかし地図を読み取ることは、知性の一段階を示します。まさに完成に向かうのでしょうか。

ジャンナンは戦場で本を開いて読みました。彼の政治は勇敢になることでしたし、最後の手段として歩兵隊の自分の仲間と連絡を取りに行くのを求めることでした。ジャンナンは守られていました。何故なら大砲の発砲を調整するためには歩兵隊の方へ行く様に、どんなに難しい遠征でも夢見る様な仲間であったからです。ジャンナンの運命は、かくして怖れられている軍団から到着する命令に依存していました。その時ジャンナンは必要な人間でしたし、彼は決して恐怖で飛び上がることなく、上手に見たり聞いたりしてあなた方の命を救う人なのです。大尉と一緒にこれらの遠征の次に、ジャンナンは砲台や飛行機の偵察手に任命されて、良く磨かれたバンドと一緒にトランペットを肩から斜めに掛け、誇り高くして散策に出ました。彼のやり方は表敬訪問により友人たちに慣れることでしたが、それは膝をつき合わせて相手を模倣しながら、大変上手に最も礼儀正しい言葉遣いになりました。彼の欠点は下士官を任務へ追い払うことで、一度は拳骨

を貰ったことさえありました。彼は馬たちと一緒に再び追い払われましたが、その後姿は汚く侮辱された森の狼に似ていました。私には彼を救済する、一連の砲撃の誇りを思い出させるための密かな方法がありました。（何故なら、かくして噂されてもいるからです）。しかし私は取り返しが付かないことを恐れました。彼には深刻なことなどは何も無かったです。（完）

（1）メリナイトは、ピクリン酸を含む強力爆薬である。

（2）当時の機関車には、前方が細くなった風切りが設けられていて、それで早く進むと考えられていたが、アランは当初からその効果を疑問視していた。

（3）ミシュは、バルザックの小説『暗黒事件』（一八四三）に登場する下男で、フランス革命で死んだシームズ伯爵夫妻の双子の兄弟を守った。最も偉大な作品の一つであるとアランは言った。

（4）第一次世界大戦中のイタリアは、1915年4月26日に英仏伊間でロンドン協定を密かに結び、5月にオーストリア＝ハンガリーに宣戦布告し、その後ドイツに対しても宣戦布告した。

私の隠れた方法とは、ジャンナンも私も所属していたT大尉に対する私の術策に由来します。この術策は友情と呼べるものではありません。しかしながら、そこに私は楽しい時間を見出しました。この大尉は陸軍士官学校生で、大戦前には砲兵隊で少し過ごした平凡な砲兵でしたが、命令する術を知っていました。学校の恐ろしい新入生いじめを私に語りながら彼は言いました、「その様にして人は冷酷になる様だ」。彼は才気に溢れた芸術家で、絵画やデッサンや本や会話を愛していました。彼の最大の楽しみは、夜にコニャックを飲んだり煙草を吸ったりするために私を招待することでした。私たちはその時には汚い学生部屋にいたかの様でした。彼は美学に関する全ての常識を知っていました。しかし、それで満足していませんでした。いずれにせよ私は、彼に衝撃を与えるためにそこにいたのです。例えば私たちにはダ・ヴィンチやミケランジェロやラファエルの絵葉書がありましたが、それらは私の処に送られて来たものです。彼は感激して私を当惑させましたが、この方法によって彼は私に様々なことに注意する様にさせました。私がそこまで真剣に考えていたのは音楽だけでした。これらの隠された対談において、私は『芸術論集』の主要な主題を試みました。私がいないと彼は退屈していました。ところで私は時々命令の敏感な点で彼を刺激しました。例えば彼が尋ねます、「あなたの部下たちは電話番をしていない時、何をしているのですか」。私は答えます、「彼らは、あなたが日中やっていることをやっています」。その時、彼は私を決して容赦しませんでした。そして実際は彼に道理があるのです。しかし、私は彼を退屈で苦しめた儘にして置きました。彼は戻りました。その瞬間に私は彼を導くことが出来たのであり、全てが可能だったこの人物を少しは穏やかにすることが出来たのです。

戦争を知らない人々は、単なる大尉は東洋の独裁者と同様の権力を握っているに違いないと間違っ理解します。一連の全く単純な命令を、一つの例として理解されるでしょう。砲台の後にベルナルという名の若い肉屋がいましたが、彼はベッドやテーブルがある今でも人が住んでいる村で、自分の仕事を行いました。彼の仕事は、牛を細かく切ることであり、最上の部位を薄い布で包むことであり、大尉や中尉や曹長の権力者の命令で運命づけられていました。彼は幸せでした。勿論、彼は善良な人間でしたが、結婚に対しては一度失敗していました。そこから大尉の気に入らず、全く単純に命令しました。「砲手ベルナルは明日リュックサックを担いで出発し、ジュリーの森の監視所へ赴くこと。一人の案内人が六時にメッツの道で待機しているものである」。これは罰ではありませんでした。これは配置換えでした。この様にして偶然に私は、一斉砲撃に怖れて飛び上がり、男たちや女たちや神々を呪っているベルナルの様な人が到着するのを見ていました。このベルナルが我々の勇敢な人々の一人になったのです。そして運命は彼にかなりの負担を掛けました。彼はヴェルダンに到着しました。負傷者との交替でした。この負傷者は再度の爆発で殺されましたが、彼は腕に抱えて運び出しました。彼自身は逃れました。彼は気分を明るくする兵隊でした。その例として二つのことを示します。一番目は、単純な或る大尉が、最も単純なやり方で絶対的な権力を行使することです。二番目は、最初の怖れに従って人間を決して判断してはならないことであり、如何なる怖れに従っても判断してはならないこと

です。何故なら、最も勇敢な人たちも何度でも怖いと感じるからです。

この恐怖の問題は、私をジャンナンに立ち戻らせます。彼は臆病ではありませんでした。しかし或る日、私は彼が不安にしているのを見ました。彼はポーモンの私たちの楽園にいたのですが、その日は我が軍の勢力が後退させられて動揺していました。雪崩が始まった時、私は『組まれた両手の骨格』という表題の小説を干し草の上で読む覚悟を決めていました。私は不機嫌でしたが、理由は分かりません。そして私はそこに執着しました。ジャンナンも又、移動するのは不可能と見て止まりました。しかしながら彼は飛び降りて、敵の到達を計算しました。私は小説を読もうと思って頁を捲りましたが、一言も理解出来ませんでした。我が軍が全域を取り戻したのには感嘆させられました。人がいる処に止まることは一種の慎重さでもあることに、私は一度ならず認識しました。Wは逃げ出したいと思いつつも、ヴェルダンで殺されました。何処へ逃げ出すのでしょうか。私は決して逃げ出す術を知りませんでした。それに反して、私は脱することが重要である時、すっかりその情熱がありませんでした。そして恥辱的な時を思い出して、私は自分に言いました、「最も急を要する命令を私は今は実行しないだろう」。実を言うとその時に命令は出ていませんでしたし、行うべきことは何もありませんでした。この時の恐怖は、病気の様なものです。

如何にして私が相手のジャンナンの反抗的で非常に異なった人生を救済するのに貢献したのかを言うことが未だ残っていますが、彼は今でも生きていますし、大事な友人です。その彼は美德もかなり持っていました。彼は隣人の負担が重い時に、その負担を無くす様に命じるキリスト教の教えを実践するのを、私は一度ならず見ました。徳の高いそれらの文章は私には興味がありませんが、その行為の美德には興味があります。それ故に野営地ではとっくに私は一九一四年組のこの少年と仲良くなりましたし、何の疲れも恐れもありませんでした。彼は私たちの志願兵の小さな班から出されて、T大尉の砲兵中隊へ降りて行きましたが、より一層辛い仕事で泥だらけになり、服は穴が開き、今まで以上に罵られました。彼もブルターニュ地方のブリトン人でしたが、闘牛の様になって時々は一癖あり、気になりました。その頃は色々なものを読んでいて既に良きカトリック教徒で、進んで理論家になり、駄弁家でした。少なくとも彼は活動的でした。そして腹痛で医者に雇いながら仮病を使っていました。その時の彼はどんなことでも放棄しました。「あなたが私になって…」と彼は言います（極めて不適切です）。そして、激しい動作と一緒に、それは脅しと見做すことも出来ました。というのも彼は縁なし帽子を地面から投げ出したからです。それは分隊に身を委ねたことでもありました。T大尉が極めて真剣に、私がCのことを知っていたかどうかを尋ねた時、私は何も知りませんでした。根気強くて怖れを知らない砲手を称賛するために行う、如何なる努力も私にはありませんでした。その時、大尉は医者からの診断書を私に読み上げました。もしもCがこの診断書を背中にぴったりと付けて後方へ送られたなら彼が消え失せたことを、私は直ぐに分かりました。真面目さを粉砕しなければなりませんでしたが、私も上手にやりました。診断書には誇張がありました。そして私が知っていた様に大尉も、可笑しいと判断する様に軍医に勧められているのです。私は歓声がCから離れたことが極めて不適切であることを強調しました。何故なら、それは寧ろCに言う様になることと反対であったからです。そして、Cが縁なし帽子を地面から投げ出したことは軍隊の衣類を進んで破損するものであり

、大きな間違いである等々と私は結論付けました。私は、私が出来たことを行いましたが、その判断を下す人には笑われました。そして、先ず極端に厳しいことに仕向けられたことも私は言わなければなりません。少なくとも走って仕事を行わなければならないだけでした。司令官（少佐）は温和な人物でした。でも、その人間関係は破られました。大尉はCに関心があり、そして監視所へ送りました。もしもそれが罰であったなら、既に戦争に長けた人間にとっては、まんざらではないかも知れませんでした。監視手であり信号兵であったCは、ジャンナンよりも覚えは殆ど早くありませんでしたが、彼以上に多く覚えて、モールス式電信符号や無線電信を覚えるまでになり、それは優れたものでした。彼はそのことをそんなにも期待していませんでした。そして後になって、彼がその上で哲学的問題について考えていたことを私は理解しました。彼は言いました、「それは奇妙である。私は進路をすり減らした時の少年時代にそれを理解した。それは奇妙である。私が砲兵中隊にいた時、私は命じられたことは全て上手く行った。そして私には幾つもの罵詈雑言しかなかった。しかし、「あなたが私になって…」と軍医に言った日から全てが変わった。大尉は私に関心があった。私は無線電信を覚えた。そして、私はここで気に入られているし、もしくはほぼ気に入られている」。これは、それこそ私がうっかりとは失いたくない『ザディーグ』や『カンディード』⁽¹⁾の一部の様なものです。（完）

(1) 『ザディーグ』（一七四八）や『カンディード』（一七五九）は、いずれもヴォルテール（一六九四～一七七八）の小説である。

第七章

これらの思い出は全てが最初の冬に関係があります。そして、それらの思い出の日付を殆ど書き入れることを可能にするのは、四季の色彩です。砲兵としての我々の戦争は、取分け挑戦とか反撃とか懲罰としての砲撃にあります。以下は、私が偶然に監視手として判断を下した一つの事例です。森の端にはガルガンチュアが言っている様に、私たちから約六キロメートル離れた処に、煙から眼に見える一〇五ミリ砲の四台の榴弾砲がありました。それらは殆ど毎日私たちを砲撃していました。それらが破壊されることを私たちは知っていました。そして私にはその作戦を遠くからゆっくり観察している時間がありました。私は、小石を投げる様な砲撃を始めた七五小隊の少し後方におりました。一人の人が上に向けたり下に向けたりして発射したりする時刻となり、砲撃が始まりました。私は一種の煙を出している処に砲弾の爆発を認めました。そして私ができるのは、彼らがあちらこちらの森の中へ降りて行き、目標から極めて遠く離れていたことです。早く砲撃しても何の役に立つのでしょうか。その反対重砲の発砲がありました。我々の二つの砲兵中隊の一斉砲撃は素晴らしく、私たちが知っていたのと同じの地点に集中していて、その砲兵中隊は狙われていました。その砲兵中隊は無言の儘で死者の様でした。我々は死体と残骸になっていると想像しました。我々が砲撃するのを止めた時、沈黙が支配しました。そして再び四つの大きな煙を見ましたし、四つの砲弾の音も聞きました。退却をしなければなりません。相手の砲台はそこに置かれていて、敵の砲兵たちが見る処でのボーモンの町は火山の様になっていて、人の住めない地獄でした。六キロメートルの処をその様に想像します。実際には我々の動きも一時間の間は苦しいものでしたし、殺された馬も一頭おりました。

歩兵たちは私たちにとって、泥だらけになった幽霊でしかなく、交替の時間に、つまり薄明かりの時にちらっと見るだけでした。その時、砲兵隊は沈黙を守る様に依頼されていました。時々道を沈黙して横切り、再び降りて、直ぐに幻の様に消える蒼白い縦隊が見られました。彼らは暗い夜に再び昇って来て過ぎて行きました。春の初め頃に暖かくなって突然に異臭を放つので、時々私たちは井戸の水を汲みました。眼に見えない羊の群が私たちの周りで押し合っていました。私は、「両手で！ 両手で！」と言っていた声を聞きました。私たちは仲間たちを大変に哀れに思いました。大尉は一度か二度、洗濯釜で紅茶を用意させました。喉を鳴らす音がしましたし、幸せそうな唸り声がありました。真っ暗闇の中でのことでした。

攻撃に失敗したことも何回かありました。以下は攻撃が我々の損失になったものです。それらの攻撃をそっくりその儘集めても、大きな不都合にはなりません。我々はベルネクールを通過して機敏でした。つまりB司令官によるものであり、彼は攻撃を連絡し得る限り勝利を確信していました。それでも容易ではありませんでした。奇妙なことに我々の将校はこの作戦に一つも参加していませんでした。幾つかの砲兵中隊には自分たちの目標がありましたし、私たちも数々の命令を受けていました。そして歩兵隊の地下室へ屢々走って行かなければなりません。連絡網は切られていたり妨害されていたからです。砲撃の下準備をするとなるや否や、Wと私は走ったり跳んだりして、信じられない位に熱狂していて如何なる恐怖もありませんでした。でも、二人

の興奮と一緒に運ばれて行くことは出来ません。そのことは理性によって同じ装置に関心が行くことになり、信じられない位にお互いが似て来ます。逃げる事又は攻撃することは、常に走る事です。全てが最後は殆どが次の言葉に落ち着く命令になります。「徐々に砲撃の速度を遅くすること」。興奮は完全に失敗しました。私はそれらの結果を一度見ました。あるいは寧ろ聞きました。攻撃が失敗した後では、何時もの様に仄めかしただけで理解しなければならなかったのです。私は次の様な内容の伝言を歩兵隊へ伝えました、「監視所から見えたのは、兵士たちの混乱と戦闘の一種の中断です。この混乱に関して報告して下さい」。その回答は考えても既に私には驚きです。しかし私はその回答を正確に再現します。それらのことは忘れられません。その班は次の様に回答しました、「一時休戦は負傷兵たちを退却するために結ばれた。体面上の一斉砲撃は戦闘の再開を告げたのだ」。私は今、司令部上層の回答を引用します。何故なら、その回答はまさに軍隊式であるからです。「事態が、あなたが言う様に運ばれるのは不可能である。もっと納得のゆく説明を私は待つ」。そうした後で、私は実際にもっと適当な報告を伝えましたが、大変に混乱し、その時は人間も武器も動けず信じられない泥濘で、戦闘の一時中断が考えられました。更に私は、もっと混乱した悲劇的な話を聞かなければなりませんでした。夜になって私たちの電話室に将校たちがテーブルに着いていました。私の短靴が嘗てそうだったのと同じ位に、頭からつま先まで泥だらけの二人の中尉がおりました。これらの人物たちは狂人の様でした。そして、ばらばらになった破片の様に、それでも大変に明瞭であった非難の声を出して防壁の中で飛び上がっていました。部下たちは腿まで泥濘に嵌まって、お祭り騒ぎの様に銃を発射していました。明らかに攻撃は不可能であり、非常識でさえあり、支離滅裂で理解出来るものではなく、取っ掛りさえもありませんでした。走ることも出来ませんし、歩くことさえ出来ませんでした。「彼らは従ってそこに見に来ているのである。彼らは何も信じないし、あそこで座った儘でいる。しかし私たちは全員に言いに行くのである」。彼らは平静になって、元気を取り戻しました。それから少し後に、私は彼らを待っている車まで案内しました。私は怒りの最後の爆発を聞きました。「彼らがここで鎮まったのは大変幸いだ。彼らは銃殺刑ものだった」と最後にT大尉が言いました。

私がこの冬の期間に記憶に留めていることは、信じられない程の混乱であり、秩序ある教育の欠如です。子供たちの戦争です。我々の砲兵中隊の下士官たちは命令を受けました。B司令官は我々の大尉たちとは知り合いでなく、私たちしか信用していない様に見えました。砲手たちは悪魔の如く大砲に飛びかかり、砲尾に砲弾を装填する前に細長い砲弾に優しく接吻すると語られていました。私が再び奮い立たせるための或る伝言を送った時も同じで、そのことを私は信じました。私が電話から聞いた騒ぎとは、熱い歓声だった様に思いました。どんな権力にも嫉妬があります。その理由が説明していることは、我々の将校たちが地下室に止まっていたことです。決着が付いた時に、彼らには次々に情報がやって来ました。私は憤慨させられました。理解することが出来ませんでした。これらの狂気は一九一五年四月の攻撃で終わりました。砲弾を数え始め、何事かを準備し始めました。

私たちを興奮の中で困惑させるのは、全てが教育計画によって始まりましたし、私たちは奇妙であると考えました。しかしながら始めなければなりませんでした。そして、良く見るための教

育は、軍人たちにとっての特技であり、彼らは驚くべき教師たちです。私たちは棒の上に電話線を張ったり繋ぎ合わせたりすることを覚えるための、住居出来る村まで、班になって移転しなければなりませんでした。それは私たちが大変良く覚えたことです。その様にして一度ならず、私は先ず通常の任務を任せられました。そして実際に私は一度も如何なる実習も受けませんでした。しかし或る日の朝、出発しなければなりませんでした。傷病軍人は残りました。そして、ベルネクールやフリレイへ回り道をさせる新しい命令が途中でありました。教育は最早必要でなくなりました。私は黒人の村の人と知り合いになりましたが、大変上手に仕事を守って育てられていて、前線から五百メートルの処でした。私は板の上に気にもせず眠りましたが、榴散弾で起こされました。私はそこで、私には大変に慣れ親しんだ道にそれが転がっていたのを見ましたが、後で危険と見做すのを学びました。その日は新しい場所で、私たちは新兵としての勇気を持っていました。その夜は待機しなければなりませんでした。そして、参謀部の或る将校は私たちを大きく傾いた平原に導きました。左側には歩兵隊がおり、右側には森があり、そここの一本の樹木には、監視所と記されていました。歩兵隊の仕事として展開している前線と、監視所の仕事としての相手と、歩兵隊の監視所としての相手があります。新規の有り余る程の設備があります。でも、暗い夜にしか操作しません。二班でやります。下士官のデュジャルダン、何時も行っていた様に最も危険な任務に就きました。私は序でに、陽気で果敢としたのっぽのこの戦略家に敬意を表しています。彼は将校になりましたが、それを自慢することはありませんでした。私は監視所では、私を伍長と見做していました。私たちはそこで時を待ちます。夜になると騒々しく興奮しました。私は、一五五ミリ速射重砲である〈リマヨ〉が何台も到着したのを見ました。これらの巧妙な機械に私は驚嘆しました。次に煙の出ない火薬と同様に、速射が政府の考えでもあるのを私は理解する機会がありました。速射は直ぐに砲弾が不足します。ところが重砲は熱くて操作が出来ません。それで〈リマヨ〉は呆れる程射程が短かったことを私はつけ加えて言います。それ故に前線近くに十分接近しなければなりませんでした。ドイツの重い曲射砲の射程は十二キロメートルでした。その様にして彼らは殆ど手の届かない処に止まっていました。彼らの発砲音を聞くには、極めて良く聞かなければなりませんでした。この攻撃は効果が無かったと私は今は言えます。そして偶然に、その時から少し経ってから私はまさにT司令官の口からその理由を知りました。我々の七五ミリ砲の四分の一は吹き飛んでいました。速射の影響でしょうか。あるいは間違った口径を決めた弾薬の影響でしょうか。多分、両方です。しかし、恐怖の的と判断されて、我々の軽砲に関しては一種の無力と化していました。何故なら恐らく、ばらばらになって仕舞う大砲の側には誰も止まらないからです。穴から長い紐を引っ張って発砲が行われていました。七五ミリ砲で短い時間で、どんな場合でも二発を発砲する方式を取り始めると、信頼が少しずつ戻って来ました。私たちのものも、まさに同じく旧方式に後退して腕の力に戻るものになりました。

私はこの奇妙な夜の事を思い出しますが、それは夢の様でした。弾丸は絶えず音を立てて唸っていて、私たちの内の誰に命中するのかも私には理解しようがありません。弾丸は十分に高い処を通過しているものと私は仮定します。しかしながら待機している間に明け方になると、私は砂で覆われた地面に沢山の小さな噴火口の様なものに気付きました。すると誰かが、それは弾丸

であると私に言いました。私には信じ難いものです。それらの結果によって何事であるのかが分かり、馬たちや人間たちがそこにおりました。その日の夜は、私にとって幻影の夜でした。砲台は轟いていました。砲弾が私たちの頭上で唸り声を上げていました。弾丸も唸っていました。弾丸の尾が大空に光っていました。けれども、狭い谷の上、小さな茂みの上、広大な畑の上の大空は暗く静かでした。重要だったのは電話線を巻いた重いロールを移動することであり、巻き戻すことです。私たちには一種の希望がありましたし、桜桃酒の小瓶もありました。私は道に迷わない様に細心の注意を払いました。夜になる前に、森の端にあった樹木の特徴を覚えて置いて、再発見する様にしました。地面すれすれの処にある有刺鉄線網に出会いました。私はその間中手荒く体を横にしていたましたが、苦痛は無かったことを思い出します。難関を切り抜けるのに時間がかかりました。あの森と樹木を再発見した時は既に明け方でした。雲雀が鳴いていました。私は全く幸福でした。土手で私は、我々の動きを観察して電話を受けていた一人の砲兵を見ました。それはゴンティエでした。嬉しい驚きでした。彼には十分な火と温かいミルクがありました。この楽しい一時の後、黒人の村へ戻る事が問題でしたが、援護になるものはありません。私たちは無邪気に行きました。しかし、走ったり腹這いになったりしなければなりませんでした。その日の夜に、私はパーティーを発見したかの様にボーモンを再発見しました。この攻勢は我が軍のやや右側で行われました。馬たちは軍用運搬車に繋がれていて、我々は十キロメートル前進して行ったと言われていました。日中に全てが決着しました。でも、私たちにとっては騒音でしかありませんでした。そして沈黙でした。その次に奇妙な噂が立ちました。私の若い仲間たちは全てを信じました。私は真実の原因の一つを、もう少し前に知っていたことを声を大きくして言いました。もしもそれらの噂を解明したかったなら、それらの情熱を見抜かねばなりません。そこから私は、もう一つ別の攻勢と関係があることの範を示します。私は伝令の車の中に戻りましたが、それは私たちが助手や神学校の生徒であると感じていた一種の看護兵に場所を与えた時、大敗とその付属情報を運んでいたからです。看護兵は、リモージュの連隊を告発しながら攻撃に失敗したことを私たちに話しましたが、社会主義者で一杯であったと言っていました。外の連隊はどうであったのか私は尋ねました。彼は言いました、「あゝ、脱出出来なかったのです。火の手が非常に激しかったのです」。その原因は、社会主義者たちにとってもまさに同じであったことを私は、優しくような顔をする事もなく彼に理解させました。彼には恰も悪魔に見えたかの様だったのです。彼は道路へ飛び出しました。そして最終判決を行う宗教調停人の方へ逃げ去りました。軍隊精神と宗教精神には類似のものがあります。それは単に賭けの利益だけによるばかりでなく、判断力の礼儀正しさにもよるのです。伝令の私の友人たちも又、保守主義者たちの中におりました。沈黙によって私が一度ならず知ったことは、急進的な意見は維持するのに快くないということです。まさに急進的である純真な国民は不快感を与えられます。彼らには一つの教義であるか、もう一つの教義がなければならないのです。従って、彼らは十分に若く、そして多分新しい行動を前にしているかの如く、新しい観念を前にして単に臆病になっているのであると言わなければなりません。何故なら、私を非難する様子でも、彼らは私への信頼を失わず、尊敬さえも失わないからです。私は任務によってこの種の抵抗に慣れました。しかし、ここでは再び殆ど未開人になった私は、納得させることさえしようとしませんでした。私は下品な冗談が上

手く、謙虚に演じることも優れていました。T大尉は、私が外の兵隊と同じであったと時々私に言いました。（完）

第八章

翌年の夏になり、私にとってはもう一つの戦争の期間が始まりました。下士官のデュジャルダンはフォンテーヌブローへ去りました。ゴンティエは住居の元帥になり、私の上官になりました。私はその頃には上等兵でした。高い階級が私に与えられました。私の本能の働きによって拒みました。そちらに引き寄せられる儘になりたくありませんでした。私は自由の儘でした。従って、命じる代わりに意見を求められることも一度ならずありました。命令が常に敬意を払うものであったと認める機会もあります。私が権力を握ったなら、別な命令をいただろうと私は言うに違いありません。この時期の私たちは、大変に怖かったB大尉から解放されていました。彼の代わりの者は、ロリアン校の老先生として私を覚えていました。彼は親切でした。しかし私が彼に従った機会は稀でしたし、彼は厳格であり乱暴でさえありました。そして、私は彼に同意しました。彼はブルトン人でした。何時もコニャックとか桜桃酒を持っていたのは本当ですが、勤務は正確でしたし、怖くもありませんでした。彼は参戦し、殺されました。この種の上官たちと共に私には選択の余地がありませんでした。私はそうでなければならなかったのです。

この幸せな夏に、ゴンティエは自分の権力を兄弟の様に使いながら、将校たちには可能な限り私を別にしました。私たちは電話機を一兵卒に委ねて、電話網の技術者になりました。有益な仕事ですが、そこまでは余り顧みられない仕事でした。朝方の三時に、私たちは屢々加工された鱈やグリユイエール・チーズを持って霧の中や薔薇色の曙の中の道を辿っていました。夕方までに私たちは親方になっていました。電話線の後をつけること、結合部分を検査すること、摩擦で露出した部分にタールを塗った麻布で覆うことでした。森の中で道の上方に電話線を上げるために、一本とか二本の棒を切ることもあります。それと同時に砲弾の穴を観察すること、平坦な地域に電話線を通すこと、長い回り道と引き替えに通すのが危険でも時々取り替えた電話線を張ること、以上が私たちの仕事でした。参戦していた全ての人々に良く知られていた朝の一時停戦を私たちは利用しました。この散策中に私たちは砲台を発見しました。〈秘密〉と名付けられていましたが、最初の大尉によっての名前であると言われていました。そして、それは前線から少し離れていても、大変に恐るべきものでしたけれども、実際に常に秘密でした。すっかり香気で満たされた小さな森の中で、私たちは一五五ミリ砲の重々しい砲台の二本の長い筒が現れるのを見ました。そして、その斜面の上には数々の素朴な大砲が退却していました。それらは嘗て砲弾を受けたとは思いません。そこに我々の秘密の電話線の一本を流したことが良く理解されます。私たちはその仕事を学びました。切断された電話線を結び直すために、戦火の中を走り回るのは非常に辛いものです。それは発砲のためにも正確に行くことです。他のものをそこへ送る別の方法も辛いものです。いずれにせよ、この仕事は困難な行いです。我々の前線は稀に切断されました。そうなった時には、小康状態を待って秘密裏に遠回しに何らかの電話線で事を行いました。兵隊が死を怖れないのは、自分の巧みさで死を避けるのを良く願っているからである、とスタンダールは何処かで言っています。それは私たちが行っていたこの種の戦争にも完全に当て嵌まりました。幸せな静けさと安易な仕事が、従って嬉しさを二倍にしました。

大体八時頃に事は上手く行かなくなり始めました。最初の砲弾が飛ぶ音がしてゴンティエは、極めて真面目に言う処をかなり喜劇的な言い方をしました、「嫌だなあ!」。それは監視所としての或る避難所へ降りて行ったり、前線へ行こうとしたり、占領地を変えたりする時であり、一般的には銃剣をつけますが、それでは不十分です。その上に、私たちは十分話をして、実行に際しては細心でした。その理由は次のとおりです。少しその前の下士官のデュジャルダンの頃には既に、隣接した電話機は一台一台が地面にアースされていて、その地面によって通話は混線していました。如何にすれば良いのか、私はそのことを少しも自問しませんでした。受話器とマイクロフォンの小さな箱が炭素の粒で一杯で、その中で人が話していることしか私は電話機のことを知りませんでした。しかし、ランブクールから来た理工科学学校出身の将校は、電話機ばかりを調べていました。「アースの銃剣をお互いに五十メートル離して置くことがどうしても必要であるが、電話機が不足しているなあ。何をすべきだろうか」。私は考えるために十分間お願いしてから、彼に言いました、「単に十分に穴を掘って金属製の金網を詰め込んで、良好な唯一の地面の傍に地面全体をあなたは集合させることです。地面による如何なる混線も無くなるでしょう」。眼を大きく開けていたデュジャルダンは、そのことを自分で繰返し言って実行しました。そして、理工科学学校出身者に嬉しそうに微笑しました。プロの職人なら全ての人々が良く知っていたやり方を私は見付けたのですが、私は全く知らなかったことです。しかしながら大戦前に、ゆっくりとですが流行している電気に関する事を良く考えていました。モンマルトルの〈民衆大学〉の時代にも、私は冬の間中、電流や磁石や発電機やモーターについての主要な実験を、取分け学生たちから成る聴講生たちを前にして繰返し行いました。只、一人の労働者が終わりまでいました。私には取分け、自分自身が大変に土臭い理性の働きによって勉強になりました。しかし地面に関しては、本来の意味での問題は無かったのです。私は常に帰って来るための電話線を持っていました。当時の私の考えを取り戻すと、私が持っていた電話機は、配線とか水とか如何なる液体であろうと構わないで影響を及ぼすポンプの衝撃によるかの如く、様々なしるしを放っていると私は想像しました。それは常に叩かれた衝撃によってもっと小さなしるしでした。ところで、もしも私が戻って来る電話線を仮定したなら、私はこの一周の中を多少なりとも液体を走らせることが出来ました。その反対に両端があって孤立した電話線であったなら、私のポンプは、つまり私の電池は最早働きかけなくなりました。その時地面が意味していたこと、地面から戻って来たこととは何でしょうか。大したことではありませんが、戻って来る電話線は重要で、それで巨大な貯水池になり、そこでは欲しかった液体はどんなものでも手に入れることが出来るのです。そして欲しかった液体はどんなものでも押し返すことが出来るのであると私は自分に言いました。そして、これらの不完全なアースが表すものが伝えていることとは、割れ目があるとか偶然の管と結び付いた小さな貯水池で、隣接した貯水池の水位に変化が無ければ、汲むことも押し返すことも出来ない様なもので、そうでなかったなら付近のあらゆる部署に、地面によって伝言も又送り届ける結果になったことでした。しかし、本当の地面を考えましょう。つまり際限が無くて、ポンプの全ての管理人たちに共通した貯水池のことです。その時の私のポンプの衝撃は、隣のポンプを乱すことが出来ないでしょう。この推論はすっきりときれいに理解させてくれません。従って幾つもの発見が行われます。そして私がこの章を書くには、私がアルキメデスやガ

リレオのやり方で一度ならず、推論したことを知って貰うために知性の歴史のお世話にならなければならないのです。それは危険な外観に関して少しは確かな判断力を説明してくれることになるでしょう。まずは純粋な政治的論争によって私は、全てを語ることに引きずり込まれていたことを理解しなければなりません。旧約時代の祭司たちは私を文学へ行かせますが、殆ど私を忙殺させることはありません。しかし無名の友人たちには、私は何らかの説明をしなければなりません。もしも私が良識を持ち上げて勇気を起こさせるに至ったなら、私は自由のために多くのことを行ったに違いありません。

私が石器時代の方法に従って探求に向かいながら、読んだり学んだりしたことをビラにして持ち運ぶのを怠ったために、自分自身の考えを確立した私は侮辱されるに違いなく、実際にそうになりました。少し後になって私は送信することの任務のために、名前を決して知らなかった砲兵隊の中尉と一緒に何時間も付き合いながら、私は彼の主な部署を見ながら言います、「あなたは自然に地面の一カ所だけに付けていますね」。彼は答えます、「人々は至る所で一カ所だけに付けているが、それで成功している。決してその理由は理解されないのだ」。彼は彼自身のために話し、私は私自身のために答えました、「理論はそこに導いている様に私には見えます」。私は理工科学校出身者を無視しました。私は直ぐに、彼が生き生きとした言葉で証言したので、軽蔑の観念を与えることを放棄します。「理論はここで何を見るべきでしょうか。そしてあなたは何かを知っているのでしょうか」。私は元の地面に戻りました。しかし私は、最良の条件で平和の議論を再び始めるのを愛したことでしょう。何度それを私は願ったことでしょう。そして、私は独りではありません。少なくとも、これらに復讐は決してありません。そして既に少なくとも罵倒が脇で変わることはあり得ます。権力は主人と奴隷を腐敗させます。しかしながら奴隷の方が、腐敗は僅かに少ないのです。

この年の夏は話すことがありませんでした。私たちは暴君から逃れていましたし、暴君が居なければならぬ時は避難しました。軍艦の有名な大砲しかありませんでしたが、それは敵に影響を及ぼすよりも、危うく私たちに多くの損害を与えそうになったのです。ボーモンの稜線からは、その地方の大きな広がりが見えたと私は言いました。底には広い盆地が広がり、オ・ド・ムーズの地平線に囲まれていて、ヴィヌールの村が大変良く見えました。そして、ドイツ軍の駅では何台もの機関車が運転されていて、部隊の人々や弾薬が降ろされていました。我が軍の最良の大砲であれば十六キロメートルの射程距離は十分可能でした。ボーモンとフリレイの間にある素晴らしい避難所を造った水兵の射手たちがやって来ました。そこで私が見たのは口径が一三〇ミリかそれに近い優美な大砲で、軍艦の砲塔に似ていて最終防衛陣地の中で目盛付きの軸の上を回転していました。私たちは大きな希望を持ちました。実際に砲弾は恐らく標的へ行きましたが、殆どが少しも爆発しなかった様で、私たちには何ものでもありませんでした。そしてヴィヌールの駅での運行は何時もの様に続きました。しかしながら、私たちは報復の発砲を受けました。それは二一〇ミリの大きな砲弾であったことを私は初回から知らされました。私たちが詰め込まれていた地下室のドアから、私は食事用のテーブルの如く土の塊が堆くなっているのを見ました。負傷者が出血して呻いていました。海軍の将校が電話交換手の水兵と一緒にそこにおりました。そして私は、命じられた命令が大変に良かったことを思い出しております。「行こう、

出るんだ。前線を立て直しに行け」。水兵は決して行きませんでしたし、将校も同じでした。私には自然に見えました。その上、私たちも全員が恐怖に震えて愚鈍になっていました。そして弾着観測将校が地下室にいた時、私には電話が何に役立つのかわかりませんでした。ゴンティエはその日、馬たちと一緒にミノルヴィルにいましたし、これらの結果を観察していました。彼は、私たちが全員死んだと思っていました。

それとは対照的に、私は最良の素晴らしい夜会のことも思い出します。G見習士官とゴンティエと私は、一度ならず何度も敵の戦線の村々が砲撃されることを知りました。反撃が必要とされている処でした。ところが私たちはあらゆる任務から自由になっていましたので、歩兵隊と砲兵隊の中間の場所にあるリシュモンへ降りて行きました。見渡す限りに蝦夷菊が大地を覆っていました。道は草が生い茂っていて殆ど見えませんでした。有刺鉄線を過ぎて私たちは、トゥールとかシャトルーと同様に、平静な六月の空の下に横たわり、未開人に戻った様になって大きな谷間に居りました。数々の砲弾は私たちの上空を二方向へ過ぎて行きました。それは私たちには月や星々と同様に自然である様に思いました。ボーモンは火山の様に煙を出して照らされていました。一時間後に、私たちはこの恐ろしい場所で眠りに就こうとしましたが、そこは少なくとも些かもっと大地に近い廃墟にいたのです。村の最後は間違いから起こるのであり、まさに偶発事しか怖れてはならない時だったのであり、取分け夜がそうだったのであり、（完）

第九章

七月に出発の命令がありました。少なくとも滑稽で小さな事件が幾つかありました。技術者のデュジャルダン、私たちの道具や器具や電話線や梯子を運ぶために、秣用の車を整備させられました。というのも私たちには可笑しい位に小さくて、馬に引かせる軍用運搬車しかなかったからです。我々の立派な人物であるRという名の司令官は、自動車工場の出身者で、私たちの乗務員が正規の者でないことを指摘していました。全員を降ろして、殆ど全員を置いて行かなければなりませんでした。しかし彼は大変冷静に、私たちの大変に良く整備された自動車の中に彼のトランクと荷物を入れさせました。そうなのです。しかし夜に馬たちの腹まで信じられない程の泥が届く中で、森を通り抜ける時には飛ぶ様な私たちの自動車は夜も泥も二つとも解消されていました。この同じ日の夜に、揺れによって私たちは二、三人が、まさにこの泥に軍用運搬車から放り出されました。そこでは歩くよりも泳いだのです。私はそこで大変貴重な花飾りの小包を紛失しました。しかし、そのことを長く考えませんでした。明け方には、私たちは何処にでもある様な大きな村に居りました。そこでは女性たちや惣菜屋などが見られましたが、それらは忘れていたものです。私は頭がおかしくなりました。半乾きの泥しか付いていない大外套で至る所に移動しました。そして、二〇人分の食料を何でも購入しました。トゥールの周りの村から村へ、私たちは何時も夜に歩いて日中に眠り、とても文明人とは言えず、ついには列車の中に居りました。我々の泥だらけの大砲は、子供たちを驚嘆させました。そして私たちと言えば、平然としてまるで英雄の様でした。一人ひとりが順番に家畜用列車のドアの処で、足をだらんと垂らして座っていました。馬たちは良く手入れが行き届いていて養われていました。というのも、旅は馬たちを滅入らせるからです。この旅は長く続き、誰も到着を急ぎませんでした。私たちは何処へ行くことになったのでしょうか。将校たち自身も知りませんでした。私はジョアンヴィルの町と同じ様に、駅名を幾つも読みました。しかし、ジョアンヴィルは何処に悪魔がいるのでしょうか。私は今でも良く分かりません。

私たちはシャンパーニュへ行きました。そして、それがはっきりした時、言葉が出る様になりました。新たに素晴らしい攻勢が行われ、そこでは騎兵隊が戦線を突破したと言われていました。これは信じられます。それなのに何故信じないのでしょうか。戦場にはあらゆる可能性があります。でも、事実はそれが本当でなかったのです。それから間もなく私たちは、それを知る様になりました。事実は目の前にあると言えます。こうして私たちはサン＝イレールで降りました。納屋の中の沢山の人の間で泊まりました。哀れなこの地方のふくれ上がったヴァーヴル平原は何という変化でしょう。白亜の粉末で喉が渴きました。この年の秋は温かでした。私は車付きの調理台で、固まっていた熱いスープを一日で恐らく小瓶で十本飲んだことを思い出します。人々は喉が渴いていましたが、スープを拒みました。ところが、ついには私をお手本にして見習いました。Cはその後で、私が与えた忍従のこのお手本に大変びっくりした、と私に言いました。しかし、この行為においては少しも美德の欠片がありませんでした。喉が渴いている時のスープのことは、楽しみとは何の関係も無いのを私は知っていましたし、分かっていることです。

私たちは新しいことにびっくりしました。パリのバスは肉を運搬し、トラックは歩兵たちを輸送しました。ゆったりした頭巾付き外套を着た騎兵たちは、素晴らしい馬に乗って走っていました。背中に大きな白い正方形を縫い付けて着ている多数の歩兵たちも私たちは見ました。それは少しも楽しいものではありませんでした。襲撃の波はその様に、上方へ発砲するのに少しも危険を冒さない砲兵隊にも痕跡を留めていました。しかし私たちが良く知ったのは、私たちがそこで正確に発砲するためには、発砲したい場所を知るだけでは十分でないことです。背中に印を付けた人々は、決して長く考えているように見えませんでした。彼らは居酒屋から居酒屋へ行きましたが、機械的に動き回っている様に見えました。大砲は轟いていましたが、未だ余りに遠いのです。無駄な日々でした。追跡のための武器が既に先に進んでいなかったのを私たちは既に予感していましたし、それは本当でした。私たちは自分に、先に立つのを熱望することを感じていませんでした。その反対に、立ち止まった群衆の背後にいましたし、見るためには無駄でも背伸びをしているのです。以上のことから無気力が、我々の軍隊の不活動を大変上手に整えました。お金の代わりに欲しかったものが見付かったのです。私たちは小さな流れで体を洗いました。草が両岸で新鮮でした。この数日間は上官たちも、私たちを平静にした儘でした。白亜が私たちの泥をきれいにしてくれました。背中にしるしを付けた歩兵たちを見た時には、すこしは幸せになります。

とうとう私たちは夜間の進路を歩き出しました。幾つかの松の木立がある平地です。シャーロンの野営地でした。しかし私たちは全く何も知りませんでした。何時もの様に十字路で停止しては、車の果てしない列が続いていました。その時には土手でも眠りました。霧が出て来ました。それで私は朝まで夢見る気がしていましたし、或る時は軍用運搬車の上でうとうとしたり、又或る時はその横を歩いたりしました。T大尉が軍用運搬車の上に眠りに来たのを私は思い出します。夜更けに、ぐらぐらして不安定な車の梁に沿って水の流れがあり、騒ぎになりました。幾らか経ってから私は、私たちが小川を二回横切っていた様に気が十分にしました。私たちが霧の中で円を描いて回っていたことは十分にあり得ることです。斥候に出されたゴンティエは、自分の判断で塹壕の中へ降りて、朝になるまで出て来ませんでした。大きな大砲が発砲しました。しかし指揮はどんなものでも孤立していました。世界には連結具と共に軍用運搬車にも大きさがありません。時折、火が付けられた蠟燭は、曇った様な洞窟を照らしました。しかし目覚めは晴れやかでした。世界は僅かな時間で洗われました。私たちは松の木で囲まれて大変に穏やかな広い斜面に出ました。私たちの上方では、一五五ミリ砲が大音響で発砲していました。前方ではもっと鈍い音でその土地全体が振動していました。殆ど全員がモロッコ人の軽傷者たちの列が、戻り始めました。我が軍の医者が通過する時に、彼らの或る人々のことを考えました。私たちの中に顔色が緑色に変わった人々を私は見ました。彼らは通常、馬たちと生活していました。私はその時、書物が言っている砲撃の恐怖を理解しました。しかし、その全てを決して体験しませんでした。私たちの仲間は戦争の危険に良く慣れていた様でした。私はたとえば、恐怖を感じることも無く、跳び上がることもありません。私はアウステルリッツ (1) もその叙事詩も理解しました。私は事前の策として、放置されていた何百メートルもの電話線を巻き付けました。その後で、松の枝で出来たベッドに長く眠りました。あらゆる活動が静まりました。そして再び私たちは、

大変良く休息を味わいました。私たちはそれを肉体的にも感じました。この大きな傾向は、メーストル(2)が言う様に勝利に傾いている様に思いました。勿論、私たちは最早滑る様に進みませんでした。行動中の軍隊は局面上のどんな伝言でも受取って、その様な原因で進んだり、停止したり、後退するのだと私は推測します。事實は、最後の総攻撃が動けなくされたのです。私たちの砲台は松の木の下に隠されました。私たちの眼の前では馬たちの一寸した屠殺があり、ビフテキ用の馬肉になりました。私はその時に、白馬の肉は食用にならないことを知りました。本当でしょうか。それ以来、そのことに関して誰も私に教えられませんでした。誰もが溝の中や松の枝の上や下で眠りました。私たちが占領しなければならなかった陣地も余りに悪かったと言われていました。恐ろしい場所としてスーアンのことが語られました。参謀たちは退きました。私たちの馬たちは銃後に移動しました。司令官は失声に苦しみました。そのことは私たちの冷めた気力を大変良く表しました。その点について私たちの班には、電話連絡網を用意するためにスーアンへ行く任務がありました。そして私たちは、軍用運搬車の上で第六支隊となっておりましたが、常に平然として私たちと再会することを至上の喜びとしていたジャンナンによって導かれていました。三十分後に、私たちは火山の様な土地におりましたが、何度も描かれた月の様な土地で、本当に筆舌に尽くせない処です。乾いた粘土に対して、巨人の彫刻家の親指で打ち付けた様な土地です。あるいは灰色の薄片になった雀蜂の巣の様な外観を呈しています。ところが中でも身を潜めている砲兵が見る処では、その土地は避難所にはこと欠きませんでした。そこは穴と褶曲だらけでしたし、爆発しなかった榴弾と砲弾が多量にありました。私たちがスーアンで会って従属した見知らぬ少佐は、安全のために夜警をすることを勧めました。彼は間違っていないでした。しかし、私たちは自分たちの活動に関して自由でしたし、既に養成されていました。私たちに不幸なことは何も起こりませんでしたし、私たちは行動しました。他の人たちは単に電話線を運ぶだけでしたが、ゴンティエと私は大変な働きをしたのです。それというのも、でこぼこの土地を通過していた多量の電話線が切断されていたからです。困難なのは、同一の電話線の両端を確保することでした。私たちの懐中電灯は、この種の発見には大変良く役立ちました。そして、埃だらけになって、疲れ切って、お腹をすかして、喉を渴かして、夜に野営地へ戻る時は、まさに私たちは誇りを持っていました。勿論、私たちは良い待遇を受けました。更に言うと、想像力による恐怖が私たちを英雄と見做しました。私はテントの下で眠りましたが、それは私にはこの戦争で最初で最後でした。

翌日、やっと設置された砲台の後ろで私たちは、白亜が一杯で、ドイツ軍が削って造った避難所で、電話を掛けました。そこは松の幹で支えられていて、極めて丈夫に整えられていました。私たちは何の怖れも無かった低い部屋で眠りました。私はアラジンの家を信じました。何故なら、支柱の幹は全てが青白く光っていたからです。私たちはこの常夜灯の明かりで、それに関しての二つの不都合がなければ大変良く眠ったことでしょう。一つ目の不都合は、どんなに小さく動いても鳴るピアノの様に、簡易ベッドが鋼鉄製の金網の音が出ることでした。私たちはこの装置に〈消音器〉という渾名を付けました。二つ目の不都合は、まさに私たちを動かすものであり、音楽になっていたものです。それは虱でした。私たちがいたシャンパーニュ地方は、虱がたかっている(pouilleux)という言葉が極めて厳密に付けて表されているのか私は疑っています。という

のも、私は虱の群が一度ならず粉を吹いた様に白っぽい溝に発見したからです。それは他の地方では蟻を見ている様なものなのです。虱はそこではどんな軍隊にも勝つのでしょうか。私には分かりません。

シャンパーニュ地方にいた一ヶ月間に、私は沢山外出しました。ゴンティエの服は何よりも穴だらけになっていました。そして、私と離れば殺されるだろうと思い込んでいました。この予感怖がらせました。それと私の上等兵という仕事は、受話器を持って長い時間番をする仕事と両立しませんでした。一度ならず私は実行するのが困難な命令を最高権力者から受け取りました。この最高権力者は、一種の新しい人物であるJ中尉に代表されていましたが、彼は司令官を補助していて、電話や無線通信のアンテナやそれらに関連したものに関しての特別な任務を帯びていました。私はポーモンにいた終わり頃に、優雅でおべっか使いの印象があり、殆ど何時も優しく礼儀正しいこの人物が到着したのを見ましたが、彼は新式の武器で養成されていて、自分の仕事のことを考えていましたし、大変上手に命令を識別していました。私は、最初は注意しませんでした。ドイツ軍の公式声明を私は部下として翻訳した時から不幸が始まりました。彼は良き生徒として振る舞っていましたが、大変上手に言い直す術を知っていて、私に訳し直させました。彼のやり方は我が軍のために何時も何らかの仕事を探すことにありまして、下士官たちを仲介者として、特に上等兵を仲介者としてしか決して命令しないことにありまして。私には換気することしか求めなかったと理解されています。私が言えるのは、この人物はさも優しくそうですが、私には戦争の毒を盛ったのです。

私は最も不愉快で、そして最も危険であるが確かな方法による挿話で、この話を終わりにしたいと思います。しかし、その危険は単に私自身から来ていました。或る日の午後、私たちは飛行機で砲撃の修正に参加しました。私たちは任務を弁えていました。無線技士はこの分野の専門家でした。彼は飛行機から受けた命令を砲台へ伝達することに関わっていました。そして返事として地上に色々な方法で広げられている標識によって、飛行機に話すことにも関わっていました。J中尉がいなくても、全てはきちんと行われていました。中尉は全てを非難して、電話の傍で叫んでいましたが、それは電話の相手への命令と見做されていました。そして、砲台は非常に早く発砲しました。飛行士は監視するに有利な居場所を発見した時にしか発砲を命じません。要するに、この作戦を導く習慣があつた私は、猛烈な言葉を言う中尉を振り払いました。彼をそれを大変に気分悪く取って、謝罪を求めました。私はしぶしぶ謝罪しましたが、彼はそれで満足していました。しかし謝罪の時には直前に、私は彼の上に跳びかかることも考えました。ところが直ぐに分かりました。何故なら友人のCが信号兵の様にそこにいたのです。そして丁度その時に私は、他人の様に振る舞いました。そうして何も書き付けずに、その後で私に言いました、「あなたがまさに中尉を掴もうとした時、そして電話線しか持っていなかった時、あなたに反対する一人の証人もいなかったらと私は心に言いました」。そこからお分かりになることは、私が一兵卒に止まっていて、彼らの一員と見做されていたことです。しかし私は特に、常に敵の位置を監視することに気を付けた奴隷の考えを引用したかったのです。この奴隷の考えは、私には自然の様に見えますし、軍隊の全ての兵士たちにとってもその様に見えますので、もしも彼らが私の本を読んだなら、私たちの良き人々にとっては悲しいものになるでしょう。主人と奴隷の間の

戦争は、決して相手の戦争を縁取ることを止めず、全ての動きを伴うことも止めないことに人は無知でいたいのです。それは余りに素早い怒りと、上官たちの極端な厳格さを説明していることに注意して下さい。私は少しも非難している訳ではありません。そして確かにもしも私が將軍であったなら、そしてもしもこの仕事を行うことを心に誓ったなら、私は人間として如何なる憐憫も持たないに違いありません。私は人が戦争を望んでいることを認めます。しかし、それは人が望んでいることであるのを知らなければなりません。

以下は如何にしてそれから逃れたかです。私はその点について多くの事例を持っています。しかし一つだけで十分でしょう。私たちは殆ど穴の中に落ちていませんでした。J中尉が班と共に直ぐに出発して、私たちの前方にいる七五分隊まで電話線を引くことを私に命令した時、私は籠の上に鏡を乗せてひげを剃っていました。彼は、私に方向を示しました。つまり一キロメートル先への一種の出撃です。何か怖いものがあります。しかし私には既に、或る歩兵に言われた英知が少しはありました。「最早怖くはない。最早心配だけしかない」。一キロメートル先に心配は少しもありません。私は班を集合させました。私たちはこうして出発しました。前線は一進一退でした。私は帰りに、酷く興奮した人に出会いました。「どうしていたのですか。この砲撃が少しも止まないのを見て、私はあなたを呼び戻すため、待っている様にあなたに言うために人を送りました。しかし、彼はあなたを発見しなかったのです」。私は、英雄の飾り気の無さで答えました。私は、その人が私たちを十分に探さなかったのだと思います。そして、私たちの目の前の石が転がり始めると、直ぐに穴の中に潜り込み、嵐が終わるのを待ったのです。その後で、私たちは機敏に任務を遂行しました。榴弾が蒔かれた地面での夜の帰還は、危険だったかも知れませんでした。詩人が言っている様に、後は神に任せて私たちは足跡の後に続けました。これらの遠征は悲しい考えを除外した一種の興奮によって支えられていましたが、慎重さには抜かりありませんでした。

水不足は支障になりました。私の短靴と同じ位に黒いに違いなかったゴンティエの耳を私は見ました。それは髪の毛の分け目にも沢山付いていましたが、午前中に私は彼の分け目の上に水をぽたぽた垂らして行いました。水は沢山ありました。スーアンには大変に優秀なポンプが残されていました。しかし、その場所は不衛生でしたし、道も同じでした。一人ひとりがそこへ順番に行き、水の価値を知りました。私はその時、光輝いているが剥げ落ち易いワニスを両手に見ましたが、それは鳥の羽と同じ様に未開の人間の肌には自然でした。

私は或る日、避難所そのものが非常に怖くなり、決断出来なくなりました。地面の方が掘られて、白亜は籠に再び高くなりました。私は最も楽な場所において、籠を受け取っては周囲にひっくり返しながらか、土手に座っていました。大変に遠くでは砲弾が大きな音を立てて唸っていました。そしてあちらこちらで、家の様に高くなった地面から砲火が上がっているのが見えていましたが、湧き出た水に似ていました。ところがこの砲弾が私の方へ移動して来て、非常に近くなって私は心配する程になりましたが、蛙の様に穴へ飛び込む程ではありませんでした。砲弾のひゅうひゅうという音が聞こえる度に、私の耳には子供の時の恐ろしい鞭打ちが始まった様に聞こえました。私は極度に怖く感じましたが、大変に自然でした。しかし私は穴に飛ぶ込むことが正しいと判断しませんでした。そして実際に、そこに居りませんでした。不決断が最も大きな誤りの

一つです。

私は歩兵たちへの二度の遠征のことを思い出していますが、それは白垂を掘る仕事よりも危険です。しかし、恐らく私には少しも怖くありませんでした。私たちの班は、七五分隊の連中があの高い処で受け入れずにいたために、歩兵隊との関係で特別な任務を帯びていました。もしも参戦した人々のために書くとするなら、その理由を言うには及びません。しかし、その他の人々は七五分隊が発砲にずれがあった結果、知って置かねばならないことですが、我が軍の最前線に撃ったことを知らなければなりません。私は夜番をしていて不幸な砲撃を行った七五分隊の司令官と、我々の九五分隊の司令官との対談を語るために、私の話は中断します。前者の司令官は、後者の司令官を急がせました。前者は作戦区の長官として権威があつて、私たちの塹壕に極めて近いドイツ軍の塹壕への砲撃を急がせました。しかし我々の司令官は避け難い砲撃とのずれを引き合いに出して、結局は従わずに反対しました。私たちは、七五分隊の人物が九五分隊に同じ誤りを与え様としているとの観念を自然に持ちました。その一兵卒は皮肉なのです。いずれにせよ、歩兵たちの隠すことの無い怒りによって、私たちは前方の全ての監視所に気を配りました。かくして或る朝、私たちはル・ボア＝ギロームという名の土地へ行きました。私は、モロッコ人の顔をして痩せていて脅迫的ですが、真の軍人の顔をしている人々と知り合いになりました。私は初めて七七ミリ砲のドイツ軍の大砲を見ましたが、我が軍の七五ミリ砲よりも短くてどっしりしていました。そして私は、改めて火薬の違いのことを考えました。だが、考えは中断されました。何故なら屢々脇に寄らなければならなかったからです。信じられない位に沢山の馬が脇を通って行きました。百頭以下かそれ以上か私は言えません。その匂いは恐ろしい位でした。これらの馬たちが砲兵隊のものか、騎兵隊のものか私には少しも分かりませんでした。しかし、そこは有名な突破作戦の領域だったので。私たちが電話を設置した地点は地面が少し斜面になっていた背後で、何体もの死体が点在していて、少し登っていた平原が始まっていました。そうして巻いてある電話線を伸ばしながら帰って来る時、私はあらゆる場所で幾つもの死体を発見しましたが、それらは黒人の様に見えました。その点については何時も見間違えます。ゴンティエはそのことを私に教えますが、私はそれらの死体を専ら見ない様にしていました。それにその日の午前中、その場所は大変静かでした。少し後になると、もっと危険になりましたが、全体的に私は一種の停止した戦争を想像していました。我々の砲台は密集してあつたことに私は気付きました。ヴェルダンにあつてさえも私には最良と見えませんでした。

別の出撃の時には、私たちは敵の近くにまで連れて行かれました。その場所は、P 1 5と名付けていて、ギリシアの港町ナバリノの有名な農家以上に位置づけられていました。私たちは殆ど掘ること無く、一本の溝に従って行きました。そして、朝の休戦状態を利用しました。破壊された大地は形を成していませんでした。撃墜された飛行機が私たちの道を示していました。あちらこちらで情報を与える人が居りました。長い行軍の後で私たちは一種の茂みに到着しましたが、そこでは溝をもう少し掘りました。余り堅固ではありませんが、大尉の避難所もありました。そこでは私たちに案内人が居りましたが、彼はまさに不可欠でした。というのも、塹壕は曲がっていて、最早何処に敵がいるのかも分からないで戻って来て仕舞ったからです。結局のところ、塹壕は曲がりくねっていて小石だらけで少しも深くなく、小さな土手で守られていました。私は最

初に燻製ニシンを焼いていた歩兵を見ましたが、煙には気を留めていませんでした。そして次に、手に銃を持って土手の上で待ち伏せしていた伍長を見ました。彼は発射しました。そして、シャベルが右から左へ、左から右へ振られました。これは弾丸が目標に当たらなかったことを意味する一般的なサインです。私はシャベル以外には敵を見ませんでしたし、これはからかう行為だったのです。今では信じ難い様に私には思われます。これは捏造したものではありません。次に警報の叫び声がありました。私はこの叫び声の意味が分かりませんでした。皆と同じ様に直ぐに横になりました。一発の榴弾が爆発しました。七五ミリ砲の一斉砲撃が起こり、更に一層私は怖くなりました。私たちの前方や、極めて近い処で幾つもの砲弾が破裂しました。我々の狙撃兵たちも恐らく敵の塹壕を撃つ様に命じられました。彼らは出来る限りの注意を払っても、私たちの塹壕を撃つことも良くあり得ました。より一層賢明なドイツ軍の砲兵隊は発砲を止めました。私たちは電話線を伸ばしながら、素早く非衛生的なこの地域を立ち去りました。私たちは溝に沿って進みましたが、我が軍の砲兵中隊が何かに応戦して大きな障害物を突然に破裂した時、瞬間的に機関銃手に追跡されました。大地が振動して、がたがた揺れる二輪馬車の様に私たちに衝撃を与えました。ゴンティエと私は蹲った儘で溝の曲がり角にいました。ゴンティエは野兎の様に飛び出ようとしたのですが、私は動かないでいるのを規則と見做して固く彼を押えました。但し、私は松笠の形をした儘の榴弾の不発弾が私たちから二メートル離れた処で発見しましたので、私はもう少し遠くへ行くことに同意しました。そして、そこでも私は若い仲間を再び押えました。もっとも彼は動転していて、自分の力を直ぐに使い果たして仕舞いました。彼は騒音の中でも眠って仕舞いました。私は大して考えることも無く、パイプを吸っていました。この時の時間は長いものでした。我が軍の右側ではタールへの攻撃があり、我々はそれに続くのを知っていたので、騒動の元になっていました。雨が止んだ様に砲撃が止まりました。私たちは、二人の仲間が別の隠れ場を出るのを見ました。そこで改めて私たちは、電話線を伸ばして砲兵隊の領域に接近させました。私たちの電話線をもう一つの電話線に接続させる前に、私たちには更に困難なことがありました。電話線が纏れて仕舞ったのです。忍耐がありませんでした。間隔を置いて大きな砲弾が落下して来たのです。しかし壮年期の人間の考えから、私はどんな潰走も中断しました。「何処へ逃げ出すのか。私たちはここよりも良い処があるのだろうか」。仕事は終わりにになり、私たちは又勇気も無くなっていました。そして、ひゅうひゅうという音を聞く度に身を横に投げ出して、兎の様に走りました。私は決して最善に走りませんでした。ゴンティエの報告に基づいて、私たちと一緒に同行した二人の部下が戦時勲章を手にししました。私たちに関しては、私たちが私たち自身を推薦するのでなければ、まさに決して手にすることは出来ませんでした。勿論、それは私たちには殆ど重要なことではありませんでした。しかしながらその後、私たちは二人共勲章を手にししましたが、彼は将校として、私は志願兵という曖昧な肩書として手にしました。表彰とは常に名誉なものですが、私の友人の飛行士が言う様に、どんな表彰も最も貧しくてつまらないものであり、あらゆるものの中で最も単純なものに値するでしょう。時々軍隊の新聞を読んでもあります。「忠誠を尽くした軍人です。与えられた命令の実行に何時も多くの勇気と良心を示したためです。七回負傷しました」。同じ飛行士は従って、自由な人間も明らかにしていました。「それは勲章を授からずに背広を着ている人物です」。結局、権威が軍隊を

打ち倒したのです。これらの考えが、もし彼らの立場にもあったなら、ここに居りません。これらの考えは終戦後に生まれたものです。当面、そのことを私たちはそんなにも長く考えませんでした。一人ひとは自分の体の痒い処を搔いていましたし、パスカルが言っている様に、そのことが魂の全てを支配しているのです。（完）

（1）アウステルリッツは、ナポレオンがロシア・オーストリア連合軍を一八〇五年に破った場所である。

（2）メーストル（一七五三～一八二一）は、政治家・作家でフランス革命に反対し、王政の維持と教皇の絶対権を主張した。

第十章

一ヶ月も経たないうちに軍用運搬車が、砲台を探しにやって来ました。敵から遠く離れている時は快適です。馬たち自身も大喜びです。競り落とすのを仕事にしている人々は、馬からの降り際の緊張した行為や停止の時には道の中央近くで手で押さえられていた馬の頭部を、上手に押さえる老婆心を忘れません。その仕草は全てが極めて合理的です。軍隊の理屈では、少なくともあなたに核心を突く様なことを言いませんし、その方法をあなたに語っても最良のものは少しもありません。軍隊教育とは忍耐すること以外に無く、それは無知な人になることを繰り返します。でも迅速に行動する精神は悪いものではありません。しかし、この賢明な教育学は絶対的権力を前提にしています。教官は、傍聴者の様な兵たちに興味を持たざるを得ません。そこから最も優れた人々には雄弁を教えますが、平凡な人々には何も教えません。これらの快適な夜の時間に誰もが、私自身がそうであった様に、自分の仕事のことを考えていたのだと私は思います。私たちは、古くて黒い外套を着た砲兵たちとすれ違いました。彼らは軍人であっても、弾薬の列でしかありませんでした。

私たちはシャーロンの野営地の小屋にいましたが、大部分の小屋には屋根がありませんでした。小雨が降り寒かったです。私たちは、大きな薪の山から松の木を持って来て残らず燃やしました。その周りでは誰もが自分の下着を探していました。この時私は、果てしなくホメロスの英雄たちのことを考えました。気持ちの緩みも少しはありました。Cがバケツを二つ持って私を探しに来て、言いました、「七スーのシャンペンがあるが、どの位お飲みになりますか」。私は答えました、「三十リットル飲ませて下さい」。私は少しでも新鮮なものに目がありませんでした。この葡萄酒は確かに本物のシャンペンでしたので、悩みました。しかしながら私は、権力が死んでいなかったしるしを幾らか見ました。下士官たちが懸命に交渉していましたが、ゴンティエはそのことで何か知っていました。上官の権力は、責任ある下士官たちによって支配されています。上等兵は全てに堪え忍び、そして上等兵を仲間扱いしている部下たちは、上等兵に心配をかけたくありません。かくして何事もついに自ら行うことになります。私たちは殆どの者が洗濯しましたし、同じ方法を守らないと非難されました。王冠型のパンは、私が経験した以上の大きな喜びを与えてくれました。結局のところ私たちはトゥール手前の村に到着しました。そこはラ・ヌヴヴィルと言って、我が国の昔の戦場に対して開かれた狭い谷でした。そこから私たちは間もなく歯の抜けた様な村であるボーモンを確認しました。宿営は耐え難いものです。下士官たちはそこでは決して休息しません。点呼に答え円陣が作られます。大尉の話が聞かされます。T大尉は絶えず戦闘態勢の儘でいても楽しくなる方法を見付けました。それは馬たちへのブラッシング、荷車や大砲を付けての歩行訓練、馬たちの散歩です。私たちには全てが楽しかったのです。ゴンティエは戦争に参加するのを学ぶための教育を受け、戦争に決して参加しない人々の中心へ送られました。私は小さな部隊で任務を帯びた儘でいました。しかし幸いなことに私にはもう一つの仕事が見付かりました。それは完全に私に適していました。平和だった時代に、私はエツフェル塔からの電波を聞いて楽しんでいました。モールス信号を大変良く覚えました。私は全

師団の中から選抜された人々の集団で、モールス信号を学ばなければならなかったのですが、その中にCも居りました。私は直ぐ様、呼び子の音を書き取りながら、その音をモールス信号で読むことを覚えました。そして、J中尉が加わった時に私は最速で勝とうと思わなくなりました。彼はモールス信号を知りませんでした。少しも知らなかったのです。ところが彼は文字に変換する速い方法に感嘆していました。エース (as)、美 (beau)、椰子の実 (coco)、それ左だ (dia) などの文字です。これらの不思議な言葉は、子音を線、母音を点によって表されています。私たちは全員がゆっくりしたやり方で行っていませんでした。私は中尉にそのことを気付かせました。だが、中尉は私の言うことさえも聞かずに、単に言いました、「私はあなたにこの方法を用いる様に命じる」。部下たちには全く必要の無かった一連のこれらの言葉を、記憶に留めなければなりません。中尉は満足していますが、私たちには構わない様にして居りました。六名ばかりの本物の職人を非常に早く養成することは私には喜びでした。光信号による文字の送受信も知っていた二十名程の平然とした信号兵を別にしても、彼らは無線電信において輝いて居りました。一日に二回の講習が二ヶ月間行われて、全てのことが達成されました。海員の信号・航路監視兵たちも、その他に多くのことを学びます。そしてこの状況の中で私も、知識が繰返しと慣れと速度を前提としていることを経験しました。それはラテン語でも数学でも同じ様に本当のことです。しかし先ずは退屈に勝たなければなりません。そして退屈に慣れることを覚えるには、軍隊しかありません。

これらの勉強は、長い間中断されていまして、私の馬術の訓練も中断してしまいました。そして再開することになりましたが、決して長続きしませんでした。馬での散歩が少なくとも、最後まで落馬せずに到着する術を私は覚えるだけです。そこではこの動物たちの尻の上を殆ど掠める様に、氷で覆われた傾斜の急な道に降りましたが、その日は私が大いに自慢する馬たちでした。同様に私は、私の茸毛の馬と直ぐに別々に別れなければなりません。軍隊の権威ある人は、一度ならず適正に従って私を使用する術を知っていましたし、それは更にその後も起きました。

一九一六年一月まで、私たちはラ・ヌーヴヴィルに潜んでいて、そして次にはトロンドに潜んでいなければなりません。何回も演習がありました。それらは酷いものでしたが、滑稽なものでもありました。J中尉は食事中に二、三回私を呼びましたが、それは私が良く知っていたことを私に繰返し言うためであり、そして私に繰返し言わせるためでもありました。しかしゴンティエと私は、我が軍が勝利した後の翌日は大変に忙しくなるに違いなかったので、早速前日の夜の時から電話線を持って行く手段を覚えました。それは司令官を賛辞させ得るものでもありました。その上、襲撃に関する全ての動きが不受理でしたし、私たちはそのことを知っていました。でも、地位の高い司令官はそのことを知りませんでした。歩兵たちは砲火を想像して腰まで水に這入っていました。そして私たちの処から数キロメートル先で、私たちは戦争の本当の音を聞きました。日中の明るい時に、私たちは何機もの飛行機が飛ぶ大空の雲が薔薇色になり、分厚くなった煙を村々の上に幾筋も見ることが出来ました。

現実に一種の遠征がありましたが、それはやはり極めて滑稽でした。私たちは、アプルモンの高い森に沿っているコメルシーの町を前にした場所を確保しに行きましたが、そこは或る煉瓦工

場を大量の一斉砲撃で粉々にするのを目指していました。この冒険には危険がありませんでした。敵が我々の場所を知る時間が無かったのです。森は大変に美しく、奥深い避難所も本当に安全な監視所を備えていて、模様の溝が彫られたガラスも嵌まっていました。そこでは誰もが私の電話を握りましたし、私は全て司令官の名誉がかかった調整のための場面では証人にもなりました。彼は内気な人物でした。五十歩も行けば、木々を隠している霧を自分の両眼だけで見ていました。彼は晴れ間を待ちましたが、やはり無駄でした。最後の知らせが着きました、「あなたの調整は済んだのか」。「しかし、私たちには何も見えません」。「どうしてだ。全砲台は一斉砲撃の準備が完了したし、我々は最早あなたしか待っていないのだ。従ってあなたは何を考えているのか、等々」。大変に素晴らしい考えが行われたのです。T大尉は不幸を生まないために極めて遠方を攻撃する様に告げました。もう一人の大尉は地図上で調整し始めましたが、砲撃用の地図は既にありませんでした。私は彼が参謀部の地図を長い間調べているのを見ましたが、砲手たちは疲れて仕舞っています。結局仮定の儘で調整が行われて、どんな砲撃の雷鳴であっても決められた時間に爆発しました。煉瓦工場も全滅したと仮定されました。翌日、監視兵たちは煉瓦工場が無傷だったのを再発見しました。でも、私たちは既に出発していました。

私は、太い枝を燃やしていたかまどの様な、暖かな奥深い避難所での良き思い出を忘れませんでした。そこでの思い出の一部は夜にかかるものでした。それ以外は、そこから三里程離れた屋根裏部屋の中にかかるものでした。この程度の戦争なら耐えられます。（完）

（下巻へ続く）

アラン
大戦の思い出（上）

<http://p.booklog.jp/book/128326>

翻訳者：高村昌憲

翻訳者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/128326>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト